

熊本地域出土鉾留短甲の検討

編年的位置付けと配布の背景

A Study of *Byōdome Tankō* Armor Unearthed in Kumamoto :
Chronological Placement and Distribution

西嶋剛広

NISHIJIMA Takahiro

はじめに

- ①熊本地域出土鉾留短甲の検討と編年的位置付け
- ②熊本県地域における鉾留甲冑出土古墳の様相
- ③熊本地域における鉾留甲冑配布の背景

まとめ

【論文要旨】

古墳時代中期において鉄製甲冑は、古墳副葬品中で主要な位置を占める文物の一つである。その生産と配布にはヤマト政権と地域勢力との社会的、政治的関係が反映されていると考えられている。

マロ塚古墳が所在する熊本地域には、現在23基の甲冑出土古墳が確認されているが、これらの甲冑に関してはこれまで検討がなされることは少なかった。そこで本稿ではまず熊本地域における甲冑出土古墳の中でも数が多く、マロ塚古墳出土品も含まれる鉾留短甲の編年的位置付けを試みた。その結果、熊本地域から出土した鉾留短甲のほとんどが古墳時代中期後葉に位置付けられた。

そして、熊本地域における甲冑出土古墳の様相を把握するため、甲冑出土古墳の分布、墳形規模、甲冑の出土数について検討し、甲冑出土古墳は菊池川下流域、合志川流域、緑川流域、天草北部島嶼域などの地域に偏在することや、同時期の九州の中でも甲冑が集積する地域の一つであることが明らかになった。その後、熊本地域における古墳時代中期の甲冑集積の背景を理解するため、大型古墳築造、埴輪、渡来系文物という3つの要素を取り上げ、その様相を検討した。この検討結果と甲冑出土古墳の様相との比較をおこない、熊本地域へ甲冑が多くもたらされたことの背景について考察した。

その結果、熊本地域に多くの甲冑が配布された背景には、地域とヤマト政権との多様な関係性を見出すことができた。また、甲冑出土古墳を通してみた古墳時代中期の熊本地域の様相からは、渡来系の新技術を用いた内的発展と朝鮮半島との対外活動という2つのキーワードを見出すことができた。これは熊本地域のみならず、当該時期の日本列島の様相を考える上でも重要なキーワードであると考えられる。

【キーワード】古墳時代中期、熊本地域、甲冑、内的発展と対外交渉

はじめに

現在、熊本地域には23基の甲冑出土古墳が確認されている。この23基のうち11基の古墳が鉾留甲冑出土古墳である。また、各甲冑形式を見ても、鉾留甲冑が占める割合が最も多い。古墳時代において、鉄製甲冑は古墳副葬品中の主要な文物の一つである。特に古墳時代中期にみられる帯金式甲冑〔古谷1996：p.65〕はヤマト政権によって製作が一元的に把握され、政権との社会的、政治的関係にもとづいて各地域へ配布されたものであるという考えが提示されているが、そのような考えに立脚すれば甲冑や甲冑出土古墳の分析をおこなうことは古墳時代中期社会を検討する上で重要である。しかしながら、熊本地域においてはこのような研究がこれまでほとんどなされてこなかった現状がある。

本稿は、熊本県北部を流れる菊池川支流の合志川流域から出土したとされるマロ塚古墳出土品の整理報告にともなう論考である。そこで、本稿ではマロ塚古墳出土品が含まれ、かつ、熊本地域で最も多く出土例がある鉾留甲冑に注目する。その中でも今回は鉾留短甲に焦点を絞って検討をおこない編年的位置付けを試みる。加えてその検討結果をもとにしながら熊本地域に鉾留甲冑が数多く配布されたことの背景についても考察を試みたい。

①……………熊本地域出土鉾留短甲の検討と編年的位置付け

熊本地域では現在までに8領の鉾留短甲が確認されている。しかし、これら資料についての詳細な検討はこれまでなされてこなかった。したがって、まずこれら資料の編年的位置付けを知るための検討をおこなう。ただし、8領の短甲の中には小片であるなどの理由から、検討のための十分な情報を得られない資料が存在する。ここでは遺存状態が良好で、諸属性を検討することが可能な5領の鉾留短甲について検討し、編年的位置付けをおこなうことにする。その5領の鉾留短甲とは、上生上ノ原4号墳出土三角板鉾留短甲、伝左山古墳出土横矧板鉾留短甲、マロ塚古墳出土横矧板鉾留短甲、江田船山古墳出土横矧板鉾留短甲、カミノハナ3号墳出土横矧板鉾留短甲である(図1～8)。

1 鉾留短甲の変遷観と観察の視点

鉾留短甲の変遷観については、地板製作における鍛造技術の進展という視点にもとづき三角板鉾留短甲から中間的な型式である三角板横矧板併用鉾留短甲を経て横矧板鉾留短甲が製作されるという単系的な変遷観が1970年代までに提示された〔野上1968, 小林謙1974〕。しかし1980年代後半になると吉村和昭により短甲製作の簡略化という視点からの新たな変遷観が提示された〔吉村1988〕。その中で吉村は、製作簡略化の指標として、1領の短甲製作に使用される鉄数の減少、それにとまなう鉄径の大型化、帯金上下幅の幅広化をあげている。そして、これらの変化が各短甲型式で同時に起こることから、三角板鉾留短甲、三角板横矧板併用鉾留短甲、横矧板鉾留短甲がある程度の期間並行して製作されていたと指摘した。その後1990年代以降には滝沢誠が吉村の提示した視点に鉄配置や覆輪、蝶番金具などの属性を加えて鉾留短甲の型式を設定し、その編年をおこなった〔滝

沢 1991, 2001]。

吉村らが指摘するように、鉄径、鉄数、帯金上下幅の幅広化など諸属性の変化が時期を同じくすることをみても三角板鉄留短甲から横矧板鉄留短甲への単系的変遷は考え難く、三角板鉄留短甲、横矧板鉄留短甲が並行して製作されていたことは明らかであろう。

鉄留短甲は、何枚もの鉄板を鉄によって接合し、組上げることで製作される構造物である。それゆえに鉄留短甲の変遷を考えるためには、現在抽出され検討されている属性に加えて、製作工程の復元的研究にもとづいた鉄留短甲製作工程の体系化をおこなうことで、さらに検討される必要がある。しかしながら、短甲1領ごとに個体差が存在すること、個々の鉄による接合が独立しておこなわれる鉄留技法という技法上の特性などから、今回はそれをおこなうことは困難であった。したがって、ここでは上述のような製作の簡略化という視点を中心とした変遷観にもとづき、先学の成果に導かれながら熊本地域出土鉄留短甲の位置付けを試みたい。

2 各短甲の属性の抽出

吉村、滝沢らの研究において、短甲の時間的な変化を示す指標として抽出されている属性は、鉄数、鉄径、帯金の上下幅、鉄配置、覆輪などである。これらの各属性を検討対象の5領の鉄留短甲から抽出したものが表1である。以下ではこの表をもとにしながら、それぞれの属性について5領の鉄留短甲の様相を述べていく。

短甲形式と段構成 5領の短甲のうち、上生上ノ原4号墳例のみが三角板鉄留短甲であり、その他はすべて横矧板鉄留短甲である。各短甲の段構成についてみると、上生上ノ原4号墳例は欠損が大きく、後胴の段構成を知ることはできない。前胴は、三角板鉄留短甲でありながら6段構成という特殊な段構成であることがわかる。伝左山古墳、マロ塚古墳例は前後胴ともに7段構成という通有の段構成であり、江田船山古墳、カミノハナ3号墳例は前胴が1段省略された前胴6段、後胴7段構成となっている。

鉄数 鉄留短甲の各鉄板を接合するために用いられる鉄の数は、次第に減少するとされている [吉村 1988 : p.35, 滝沢 1991 : p.21]。この鉄数の多寡を示す指標として、後胴上段帯金の接合に使用されている鉄数が用いられることが多く、ここでもそれに従う。

上生上ノ原4号墳例は後胴の大半が欠損しているために、当該部分の鉄数は知れない。しかし、現存している部分での鉄同士の間隔を見てみると、上生上ノ原4号墳例はおおむね3cmであり間隔が狭い。このことから考えると、上生上ノ原4号墳例に用いられた鉄の数は、多鉄傾向にあったものと考えられよう。伝左山古墳例、マロ塚古墳例、江田船山古墳例では、後胴上段帯金の上下辺はそれぞれ6鉄で接合されている。カミノハナ3号墳例は、残存部分から復元すれば、上下辺ともに、7鉄で接合されていたと判断できる。

鉄径と形状 鉄留短甲の鉄は、用いられる鉄数が減少することにもなって低下する鉄板接合の堅牢性を保つために、直径が大型化することが指摘されている。また、直径5mm未満のものを「小型鉄」、5mm以上のものを「大型鉄」とする分類がなされている [滝沢 1991 : p.21]。

上生上ノ原4号墳例に使用されている鉄は直径が4～5mmで、ちょうど小型鉄と大型鉄 [滝沢 1991 : p.21] の中間の様相を示す。伝左山古墳、マロ塚古墳例に使用されている鉄は直径が8～9mmで、

表1 検討する鋌留短甲の属性表

古墳名	短甲形式 (段構成)	鋌径 mm	鋌数		帯金幅 最大cm	鋌配置(滝沢分類)			覆輪			蝶番板		蝶番	滝沢 分類
			①	②		引合	豎上	押付	上縁	下縁	脇	前胴	後胴		
上生上ノ原4号墳	三鋌短 (6・?)	4~5	多?	多?	4.7	E	?	?	革 鉄包	革 鉄包	?	○	?	?	I B II A
伝佐山古墳	横鋌短 (7・7)	8~9	3	6	4.9	C	C	C	鉄包	鉄包	革	○	×	方3	II C
マロ塚古墳	横鋌短 (7・7)	8~9	3	6	5.0	C	C	A	鉄包	鉄包	鉄包	○	×	方3	II C
江田船山古墳	横鋌甲 (6・7)	9~10	1	6	4.8	C	C	A	鉄包 鉄折	鉄折	鉄折	?	×	方3	II C
カミノハナ3号墳	横鋌短 (6・7)	10~11	2	7	4.9	D	C?	A	鉄折	鉄折	鉄折	○	×	長2	II C

段構成は(前胴段数・後胴段数)を表す。鋌数の①=前胴上段帯金, ②=後胴上段帯金を表す。

大型鋌に属する。江田船山古墳, カミノハナ3号墳例に使用されている鋌は, 直径が10mmを超えるものであり, 特に大型であることから「超大型鋌」と呼称したい。

鋌の平面形態はいずれも円形で, 鋌頭部の断面形態は半円形に近い形態である。中には, 形状が変化しているものも認められるが, これらは鋌留作業時の変形であると思われる。

鋌配置 鉄板接合のための鋌配置は, これまで豎上板・押付板と地板・帯金の接合や, 引合板と短甲本体との接合部分について分類がおこなわれている。この鋌配置は, 使用鋌数の減少や製作工程, 製作工人の系統差などに関連させて説明されている [田中新 1975・1991: p.286, 滝沢 1991: pp.21-23, 古谷 1996: pp.68-69]。

上生上ノ原4号墳例の引合板と短甲本体を接合するための鋌配置は, 特殊な段構成と関わって, 不規則な配置となっている。下段帯金付近での接合は, 地板を含めた三枚留を避けるために地板中央付近に鋌が配置されている。滝沢分類では特殊例のE類に相当する鋌配置だが, C類とD類の折衷形態のような配置である。伝佐山古墳例はいずれも帯金を鋌留することを避けてその上下に鋌が配置されている。滝沢分類C類に相当する鋌配置である。マロ塚古墳例, 江田船山古墳例の引合板と短甲本体を接合するための鋌配置は伝佐山古墳例と同様である。しかし, 押付板と地板・帯金の接合のための鋌配置が異なっている。すなわち, 帯金の上下に加えて帯金の中央にも鋌が配置されていて, 三枚留を避ける鋌配置の滝沢分類a類にあたる。カミノハナ3号墳例の引合板と短甲本体との接合のための鋌配置は, 基本的に各段中央に鋌が配置されており, 滝沢分類のD類にあたる。押付板と地板・帯金接合の鋌配置はマロ塚古墳, 江田船山古墳と同様の鋌配置である。

5領の短甲の鋌配置は, ほとんどが三枚留を避けるような箇所には鋌位置が決定されている。上生上ノ原4号墳例には, 複数の未使用孔が認められるが, これは, 各鉄板の仮組みにおいて鋌配置を決定する際, 鋌位置決定の試行錯誤がなされたことを示しているものと思われる。

帯金 帯金の幅については, 次第にその上下幅が広がっていくことが指摘されている [田中 1975・1991: p.281, 吉村 1988: p.35, 滝沢 1991: p.29]。その要因については, 製作の簡略化にともなって, 従来の地板と帯金の関係では短甲の堅牢性が保てなくなったためという指摘がある [滝沢 1991: p.29]。帯金の幅は明確に分類されていないが, 概ね, 幅4cm未満が幅狭, 4cm以上を幅広の

ものとして捉えられているようだ。

上生上ノ原4号墳例では、帯金の幅を計測することができるのは右前胴下段帯金のみで、その幅は4.7cmである。上生上ノ原4号墳に幅広の帯金を用いられているのは、6枚構成という段構成によるものと考えられる。伝左山古墳例は後胴下段帯金、左前胴下段帯金がそれぞれ3.7cm、3.8cmである。しかし、それ以外の帯金には4.0～4.9cmと幅広いものが用いられている。マロ塚古墳例には、すべて4cm以上の幅が広い帯金を用いられている。中でも、後胴上段帯金は幅が5.0cmで、非常に幅の広いものである。江田船山古墳例には、4.6～4.8cmの、カミノハナ3号墳例には4.8～4.9cmの帯金を用いられており、ともに5cmに近い幅広のものが用いられている。

覆輪 覆輪には、革綴短甲と同一技法で施工された革組覆輪と、鉄留技法導入期以降の短甲にみられる革包覆輪、鉄包覆輪、そして鉄包覆輪を簡略化した鉄折覆輪がある。

上生上ノ原4号墳例は欠損が大きく、覆輪部分が残存するのは、前胴上下辺と後胴上辺のみである。後胴上辺の覆輪は幅広の鉄包覆輪が施されており、その幅は約9mmである。前胴上下辺の覆輪は鉄包覆輪の端辺沿いに革紐が綴じ付けられるという覆輪が施されている。同様の例は管見になく、特殊なものである。伝左山古墳例には、前後胴の上下辺ともに幅約5mmの鉄包覆輪が施されている。後胴右脇部には、革覆輪が施されているが、革の遺存状態が悪いために、革組覆輪か、革包覆輪かの判断ができない。マロ塚古墳例には後胴右脇部を含む全周に幅約5mmの鉄包覆輪が施されている。江田船山古墳例には、後胴上辺のみ幅約5mmの鉄包覆輪が施されており、その他の前胴上辺、前後胴下辺、右脇部には鉄折覆輪が施されている。カミノハナ3号墳例には、前後胴上下辺、右脇部に鉄折覆輪が施されている。

開閉装置及び蝶番金具 開閉装置は鉄留技法導入期以降の短甲に取り付けられており、両前胴開閉式、右前胴開閉式、そして、類例の少ない左前胴開閉式がある。また、鉄留技法導入期には、革綴短甲でありながら開閉装置を備えるもの、逆に鉄留短甲でありながら胴一連であるものなど、短甲製作において新旧技術の混在する様子がうかがえる。両前胴開閉式や、胴一連の鉄留短甲は古相を示し、次第に、右前胴開閉式へと定型化していく様相を見て取ることができる。脇部に取り付けられる蝶番板は、両前胴に取り付けられるもの、前胴のみのものがある。製作の簡略化にともない、次第に前胴のみに取り付けられるものへと統一されていく。また、蝶番金具は、金具の形状、接合のための釘数などによって分類されている [小林行 1982・1991 : pp.368-370, 滝沢 1991 : p.24]。

開閉装置について5領の短甲を見てみると、上生上ノ原4号墳例は欠損が大きいが、右前胴に蝶番板が取り付けられていることがわかる。そのため、右脇部に開閉装置が存在したことは明らかである。しかし、左脇部が欠損しているため開閉装置の有無は不明で、現状では右前胴開閉式か両前胴開閉式かの判断はできない。伝左山古墳、江田船山古墳、マロ塚古墳、カミノハナ3号墳例は、右脇部のみ開閉装置をもつ右前胴開閉式である。蝶番板はいずれも右前胴のみに取り付けられていて、後胴右脇には覆輪が施されている。

蝶番金具については、上生上ノ原4号墳例は、欠損のために不明である。伝左山古墳、江田船山古墳、マロ塚古墳例には方形3釘形式のものが取り付けられている。カミノハナ3号墳例には、長方形2釘形式のものが取り付けられている。

3 各短甲の編年的位置付け

以上、5領の短甲について、鋳留短甲の変遷を知る上での指標とされる各属性を検討した。この検討をもとにこれら5領の短甲の編年的位置付けをおこないたい。

検討した5領の短甲は各属性の異同により大きく3つのグループに分けることができる。すなわち、①小型鋳が用いられ、前胴6段構成で、特異な覆輪が施されている上生上ノ原4号墳例、②大型鋳が用いられ、前後胴7段構成で、鉄包覆輪が施されている伝左山古墳例、マロ塚古墳例、③超大型鋳が用いられ、前胴6段、後胴7段構成で、鉄折覆輪が施されている江田船山古墳例、カミノハナ3号墳例の3つである。この各グループは、小異を除いて共通した特徴を備えていることから、その位置付けは互いに近いものであると考えられる。そこで、記述が重複し煩雑になることを避けるためにも、各グループごとに、抽出した各属性にその他の特徴を加味して検討をおこない、その位置付けをおこなうこととする。

上生上ノ原4号墳(三角板鋳留短甲, 図1)

この短甲について、編年上の指標とされる各属性についてみると、鋳の直径は4～5mmで小型鋳と大型鋳の中間的様相を示し、使用される鋳数は残存している部位から考えて多鋳傾向にあるものと判断される。帯金の上下幅がわかる部分は前胴下段帯金のみで、4.7cmとやや幅広である。これは、三角板鋳留短甲では特殊な前胴6段構成という段構成に起因するものと捉えられる。直径の小さな鋳で多鋳傾向にある鋳留短甲は、古相を示す三角板鋳留短甲と最古式の横矧板鋳留短甲に限られており、これと同様の特徴を備える本短甲も、鋳留短甲の中では古く位置付けられるものであろう。

引合板部分での鋳配置は、段構成との関係でやや不規則な鋳配置となっており、滝沢分類では特殊例のE類に相当するものである。一つ一つの鋳をみると、引合板と上段地板、中段地板を接合している鋳を除いてはすべて二枚留である。短甲内面を観察すると、未使用孔がいくつか認められる。未使用孔があるのは地板あるいは帯金が引合板や蝶番板と接合される部分に限られることから、

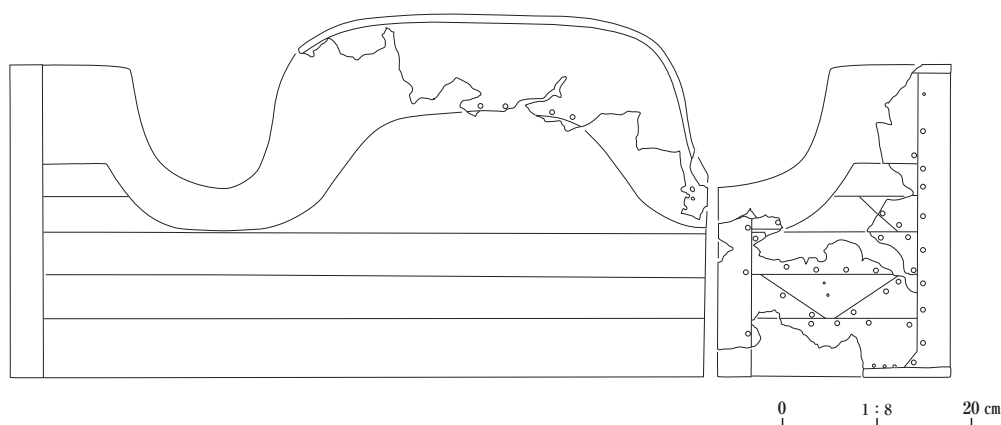


図1 上生上ノ原4号墳三角板鋳留短甲展開図(外面)

未使用孔は短甲本体に引合板、蝶番板を取り付ける際に鉾位置が変更されたために生じたものと考えられる。中には、三枚留を避けるための鉾配置変更にもない未使用になったと思われる孔も存在する。

三角形地板が用いられる短甲は前胴地板配置により分類がなされているが、本例は、前胴地板配置が鼓形になる A 型 [小林 1974・1991 : p.183, 鈴木 1996 : p.34] である。この A 型の地板配置をもつ短甲は、製作の効率化志向が強いと指摘されている [鈴木 2005 : p.79] が、三枚留を避ける本例はその一例と言えよう。

本短甲の特徴として、段構成と覆輪があげられる。本短甲の段構成は前胴 6 段構成である。地板に三角形板が用いられる短甲のうち前胴 6 段構成となるものは、滋賀県大塚越古墳例、韓国道項里 13 号墳例、福井県二本松山古墳例があげられる程度で数が非常に少なく、特殊な段構成であるといえる。その中でも、二本松山古墳例は、胴一連であることや地板配置など異なる特徴を備えてはいるが、接合技法が鉾留であること、前胴上段地板に長方形鉄板が用いられていることなど、本短甲と近い関係にあることがうかがえる。

覆輪についてみると、後胴上辺には鉄包覆輪が取り付けられている。覆輪の幅は約 9 mm と幅広で、古く位置付けられる要素であるとされている [鈴木 2005 : p.84]。対して、前胴上下辺に取り付けられている覆輪は、鉄包覆輪沿いに小孔が穿たれ革紐が綴じ付けられるというもので、管見では他に例を見ないものである。本例の覆輪に類似するものとして、革覆輪のための穿孔の上から鉄包覆輪が取り付けられる例が、宮崎県西都原 4 号地下式横穴出土横刃板鉾留短甲、兵庫県亀山古墳出土横刃板鉾留短甲 (2 号短甲) などにみられる。しかし、これらは、設計の変更、あるいは補修にともない革覆輪が変わって鉄包覆輪が取り付けられたものとされており [田中 1978 : p.37]、本短甲のように鉄と革という 2 種の素材が同時に使用されるものではない。したがって、本短甲の覆輪は、上記、類似例の覆輪施工とは異なった解釈が必要となる。本来、覆輪は短甲の縁辺を覆うことで人体に当たる部分を保護するものであることを考えれば、人体に接しない側の覆輪端辺沿いに革紐を綴じることにはなんら実用的な機能を想定し難い。したがって、ここでは装飾的な意味合いがあったという可能性を指摘し、今後の類例増加を待ちたい。

本短甲には、鉾径や接続、幅の広い鉄包覆輪など、鉾留短甲の中でも比較的古相に位置付けられる要素が多い。また、未使用孔が多く、鉾留位置の決定に試行錯誤の跡がみられることから、本短甲製作には鉾留短甲製作に熟練していない工人の関与も推定される。しかし、それと同時に三枚留を避ける工夫が随所に認められること、やや不整形な地板形状など新しく位置付けられる要素も認められる。前胴 6 段構成であることや、他に類例のみられない覆輪が取り付けられていることなど、特殊な要素が多い本例は、変形板短甲 [橋本 2002 : p.5, 橋本 2004b : p.156]、特殊短甲 [鈴木 2005 : p.84] などと呼ばれる一群の範疇と捉えてもよい製品ではないだろうか。また、胴一連や革紐覆輪が比較的多い三角板鉾留短甲のなかで、開閉装置を備え、鉄包覆輪が取り付けられた本短甲には新技術の積極的な導入の意図が認められる。これら、新旧要素の混在や特殊な形態から、本短甲は鉾留技法導入後さほど時間をおかない時期に製作されたものと評価できるだろう。須恵器型式では TK216 型式期、滝沢編年に照らし合わせると、I b 式と II a 式の間中間的な様相をもつ。

伝左山古墳・マロ塚古墳(横矧板鉸留短甲, 図2~5)

この両短甲の共通点は多く、①前後胴7段構成、右前胴開閉式の横矧板鉸留短甲であること、②鉸の直径、③後胴上段帯金に用いられている鉸数、④帯金の幅が広いこと、⑤引合板連接における鉸配置、⑥右前胴開閉式であること、⑥蝶番金具が方形3鉸形式であることがあげられる。

編年の上での指標とされている各属性に目をやると、使用されている鉸の直径は8~9mm、後胴上段帯金の接合のために用いられている鉸数は上下辺とも各6鉸である。帯金の上下幅はいずれも4cmを超える幅のものが用いられ、特にマロ塚古墳例の後胴上段帯金の上下幅は5.0cmと非常に幅広いものである。また、覆輪には幅の狭い鉄包覆輪が採用されている。開閉装置は右前胴開閉式で、蝶番板は前胴にのみ取り付けられている。これらの特徴はいずれも新相の横矧板鉸留短甲に認められるものであり、この両短甲は新相を示す諸特徴を備えた横矧板鉸留短甲であることがわかる。

その他、短甲の観察から読み取ることのできる製作に関わる諸特徴についてあげると、各鉄板の接合のための鉸配置、鉸間隔の不均一さ、地板の形状をあげることができる。これら各要素は、鉸留短甲製作における工程の簡略化や設計のあり方に密接に関わる要素である。

各鉄板の接合のための鉸配置に関して特に注目される箇所は、引合板・押付板と短甲本体とが接合される部分、それに短甲左脇部である。引合板・押付板と短甲本体との接合部分については、先行研究で分類がなされており、それらが時期差、製作工人の系統差を示すという指摘がある〔田中新史1975・1991：p.286、滝沢1991：pp.21-23、古谷1996：pp.68-69など〕。

引合板の接合は伝左山古墳、マロ塚古墳例ともに、三枚留を避け帯金の上下に鉸留する形で、滝沢分類ではC類に相当する。押付板と帯金、地板接合部分の鉸配置は伝左山古墳例が引合板同様、帯金を避ける配置になっているが、マロ塚古墳例は帯金中央に鉸が打たれており、滝沢分類ではa類となる。ただし、いずれの鉸配置も二枚留であり、簡略化を志向していることがわかる。

滝沢分類a類とされる鉸配置は、革綴短甲の革綴位置との関係性で語られ、鉸留短甲の中で古相の要素であるとされることがある〔滝沢1991：p.21〕。しかし、このa類配置は新相の鉸留短甲にも一定数存在している。もし、a類配置が革綴以来の技術を受け継ぐものならば、その連接位置の配置は短甲全体に採用されていてもよいはずである。しかし、これらの新相の短甲でa類の鉸配置がみられるのは、後胴上段地板、前胴上段地板の接合にかかわる部分に限定的である点に注目したい。鉸留短甲は技法上の特性から、地板の設計を厳密におこなう必要がない。特に、後胴上段地板や前胴上段地板は、他の地板との重ねや接合がないため、押付板(堅上板)と帯金を接合し、あらかじめ地板で充填すべき空間を形成すれば、地板製作に厳密な設計、割付けを必要としなくなる。新相の横矧板鉸留短甲にみられるa類配置は、堅上板や押付板と帯金をあらかじめ鉸留することで、地板で充填すべき空間を創出するために採用された鉸配置であると考えられる。これによって、前後胴の上段地板製作の簡略化や、製作工程の分化も可能になると言える。

また、左脇部下段帯金における鉸配置にも注目できる。横矧板鉸留短甲では、左脇部は前後胴の地板が重なり合う場所にあたる。それゆえに、鉄板の接合や鉸留作業などに対する製作の志向が最も反映されている箇所であると言える。伝左山古墳例の左脇部をみると、下段帯金に打たれた鉸の間隔や上下の配置が乱れている部分がある。当該部分は前後胴の下段地板が重ねられている部分に相当するが、この2枚の地板と帯金の三枚留になることを避けるために鉸配置が決定された結果、

鉄留の配置が乱れてしまったものと判断できる。マロ塚古墳例には下段帯金の上下方向の鉄留配置の乱れは認められないが、横方向の鉄留間隔が他と比べて広くなっている部分がある。使用する鉄留数を少なくしようという意図があったのだろうか。鉄留短甲の鉄留配置には、地板製作、設計、仮組みなどの鉄留短甲製作の各段階のあり方が反映されており、注目できる。

地板形状については田中新史が着目して〔田中新 1978 : p.39〕以来いくつかの指摘がある。古谷は地板の厳密な整形が省略された結果、地板の輪郭が次第に丸みを帯びた形状へと変化することを指摘した〔古谷 1996 : p.70〕。さらに滝沢は、地板形状を3つに分類し、これらの差が古谷の指摘に加えて、鉄板接合のための鉄留位置に対応したものであるとしている〔滝沢 2008 : p.17〕。

鉄留短甲の中で地板輪郭形状の変化がよく観察できるのは、引合板と接続される部分、前胴上段地板、後胴上段地板である。中でも、前胴上段地板、後胴上段地板はその変化が最も顕著に認められる。これは、当該部分が鉄留配置の部分でも述べたように、地板形状が不整形であっても短甲製作上問題とならず、地板の整形という手間を省くことが容易な部分であるためであろう。このことは、上述のように鉄留配置滝沢分類 a 類の解釈とも関連が深い。今、両短甲の地板についてみると、前胴上段地板、後胴上段地板、各段地板の引合板側は丸みを帯びて、不整形である。したがって、両短甲の地板製作には鉄留技法の特性を生かし、簡略化が志向されていた様子が看取できる。しかし、中段地板、下段地板の左脇側端辺は角をもちやや丁寧に整形されているように感じられる。このことは、当該部分が前後胴の地板が重なり合う部分であるために、各鉄板の接合において三枚留を避けるための鉄留配置や鉄板の重ね位置の割付けに対してやや厳密さが必要であったためと思われる。左前胴下段地板など、左脇側端辺のみが直線的に裁断され、その他の部分は不整形なものも存在することからは、鉄留短甲地板の製作は、あらかじめ、おおよその大きさに作出した地板を、仮組みの段階で前後胴の地板の重ねや、鉄留配置を調整するために適当な長さに裁断するという製作工程も想定できる。

この両短甲は、編年上の指標となる鉄径、鉄数や、地板形状、鉄板接続のための鉄留の配置などから、製作に際して簡略化を志向している様子が看取できる。これらの特徴から、この2領の短甲は鉄留短甲製作の中でも後半段階に位置付けられる。須恵器型式ではTK 23型式期に、滝沢編年では、II c 式に当てはめることができる⁽¹⁾。また、滝沢は鉄留短甲の蝶番金具、覆輪のあり方から鉄留短甲を6つにグループ分けし、これらのグループといくつかの属性のありかたから、鉄留短甲製作に2つの技術系統を見出している。この中で、両短甲が属する方形3鉄留グループは横刃板鉄留短甲量産期に新たに組織された集団の技術系統に属するとしている〔滝沢 2008〕。これらに属する短甲の特徴を見ると、属性や形態に斉一性が見出され、しかもその特徴は製作の簡略化を志向しているものであることが言える。このことから、この短甲群が多量生産を目的として、簡略化を追及して製作されたものという想定は支持される。また、滝沢はこの2領と福岡県馬場代2号墳出土横刃板鉄留短甲を同一の最小製作単位として捉えている〔滝沢 2008 : p.28〕。これらの短甲は、後胴右脇に用いられる覆輪や、左脇部における前後胴接合のための鉄留配置など、若干の相違点もあり、製作の最小単位とにわかに認めることは難しいが、これらの短甲出土地の時期的、空間的近似性は滝沢も指摘する〔滝沢 2008 : p.29〕とおり注目できる。

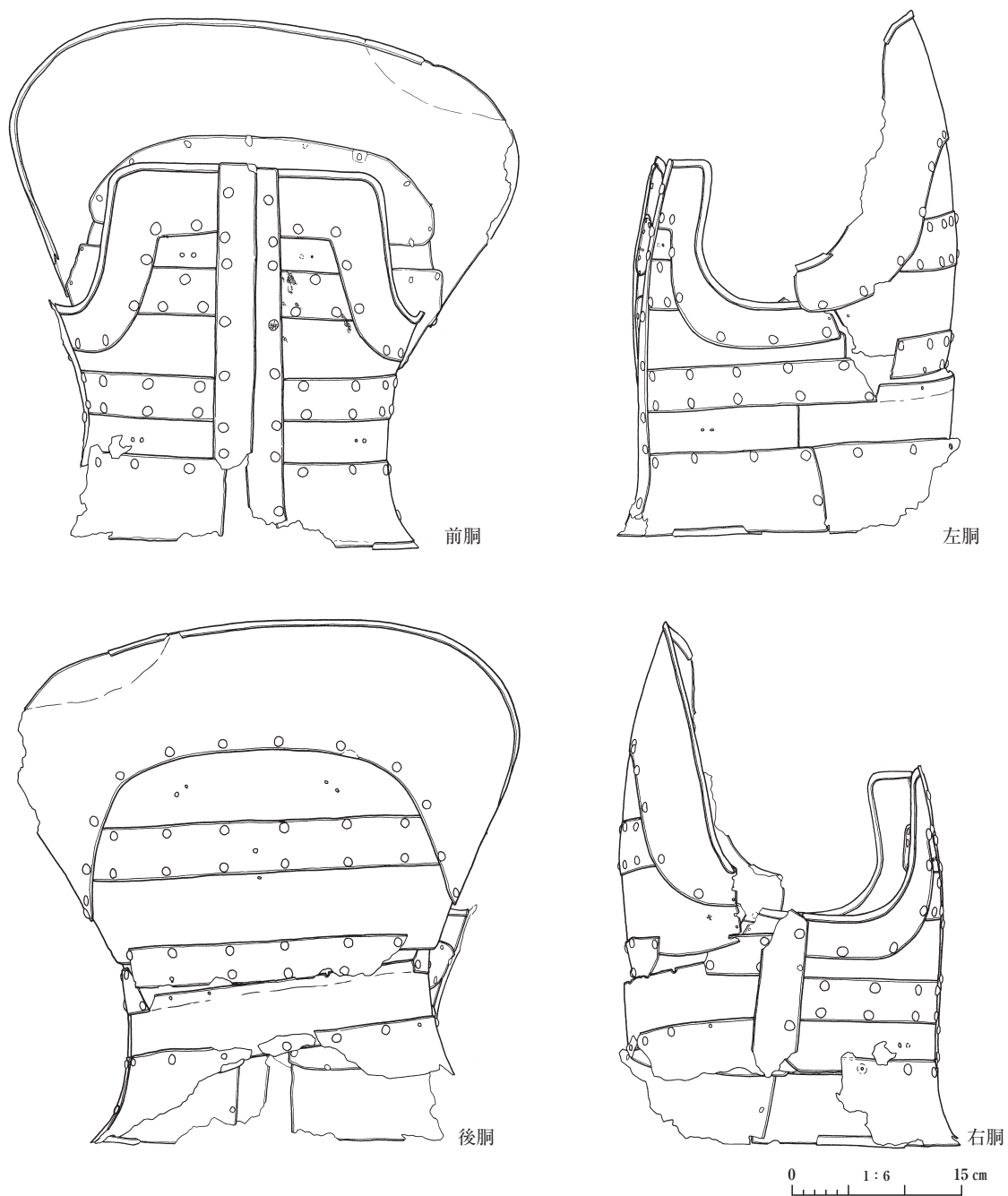


图2 伝左山古墳横板鉾留短甲実測図(外面)

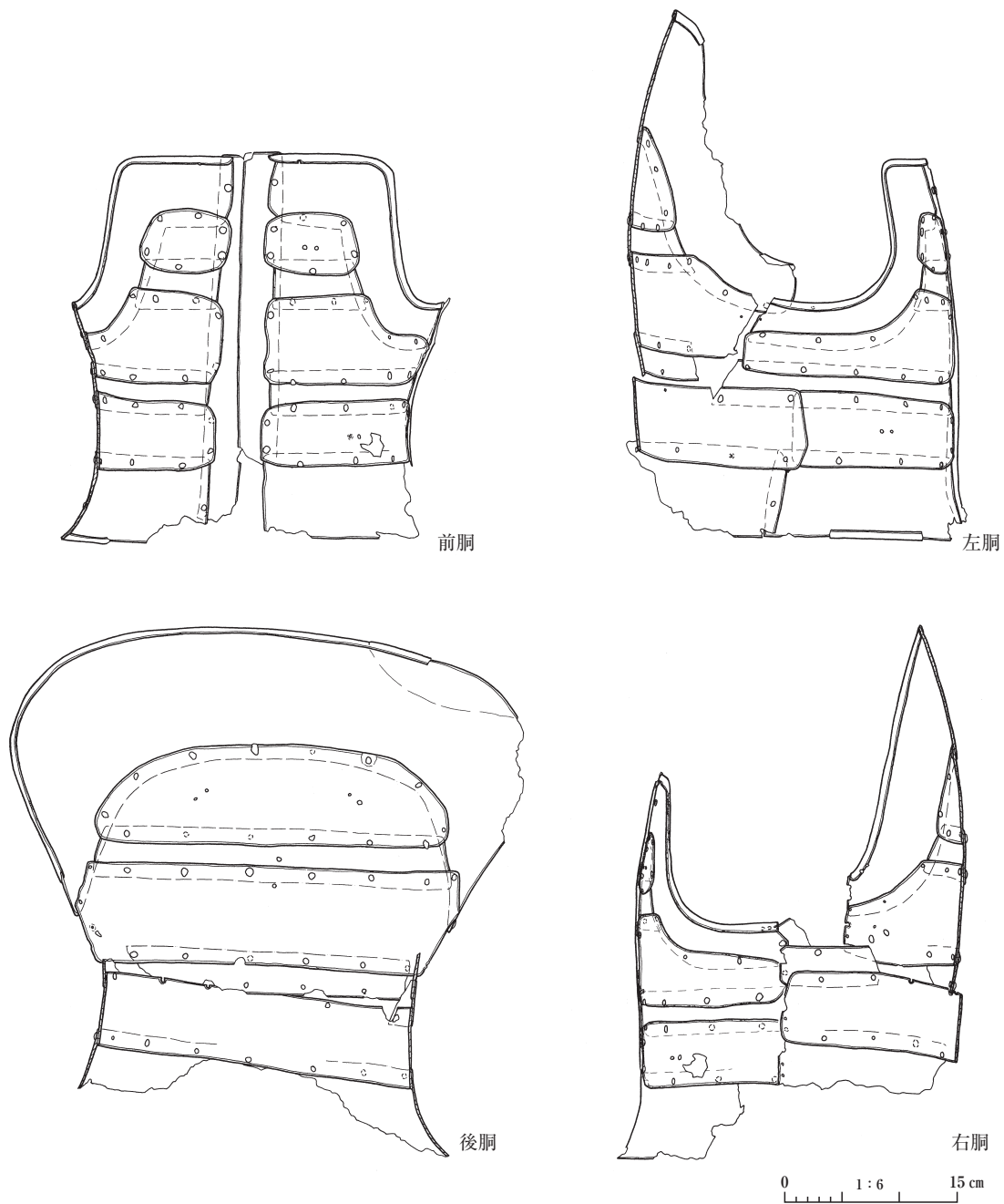


図3 伝左山古墳横矧板鉄留短甲実測図(内面)

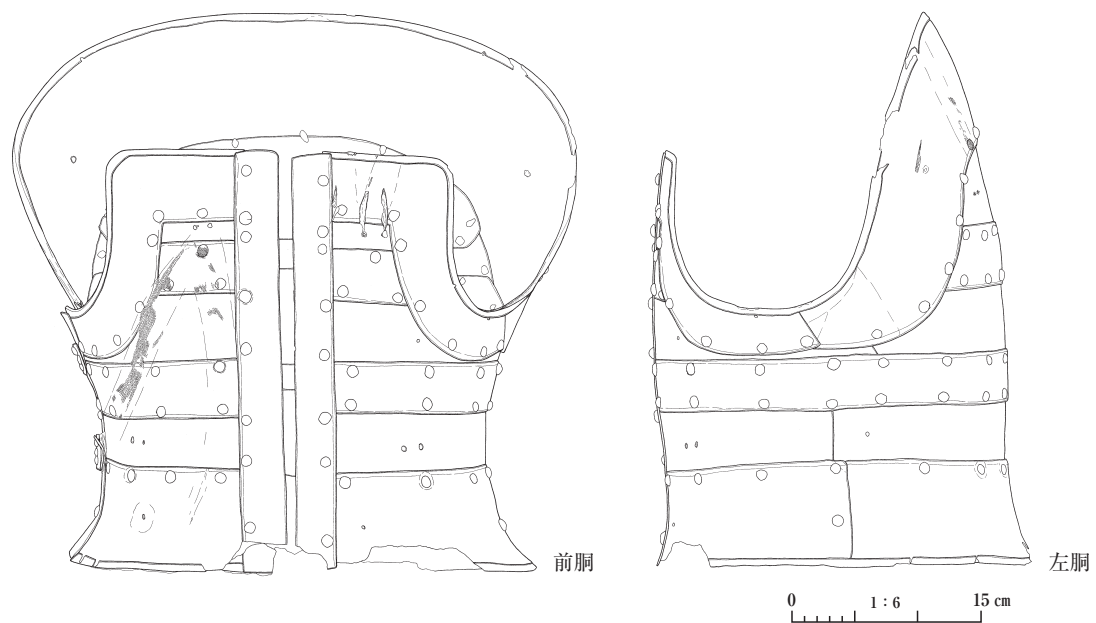


図4 マロ塚古墳横矧板鉄留短甲実測図

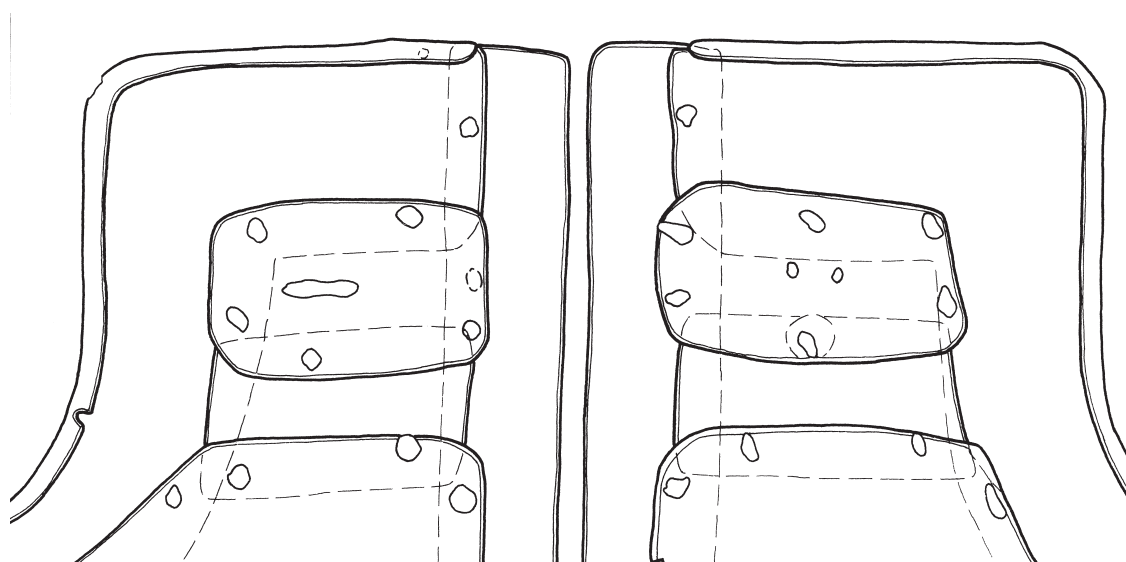


図5 マロ塚古墳横矧板鉄留短甲前胴上段地板(S=1/2)

江田船山古墳・カミノハナ3号墳(横矧板鉄留短甲, 図6~8)

この両短甲の共通点には、①前胴が1段省略された前胴6段、後胴7段構成、右前胴開閉式であること、②10mmを超える超大型鉄が使用されていること、③覆輪に鉄折覆輪が採用されていること、④押付板右脇に小鉄板が継ぎ足されていることがあげられる。

編年上の指標とされている各属性について見ると、使用されている鉄は超大型鉄で、後胴上段帯金の接合のための鉄数は、江田船山古墳例で上下辺とも6鉄、カミノハナ3号墳例では上下辺とも7鉄である。カミノハナ3号墳は短甲がやや大型であるために後胴上段帯金の左右幅が大きくなっている。そのために使用される鉄数も7鉄となっているが、鉄同士の間隔は江田船山古墳例とほぼ変わらない点を指摘しておきたい。

鉄留短甲に使用される鉄数は鉄の大型化にともない減少するが、超大型鉄によって接合されている両短甲に用いられる鉄の数は、鉄径が10mm以下のものと変わらない。6鉄より少ないものには、大分県扇森山横穴出土横矧板鉄留短甲の4鉄、宮崎県島ノ内石坂古墳出土横矧板鉄留短甲、福岡県小田茶臼塚古墳出土横矧板鉄留短甲の5鉄などがあるが、類例は少ない。このことは短甲の堅牢性を保持することのできる鉄数が、後胴上段地板では6鉄程度までであったことを示しているのかもしれない。帯金幅は、いずれも5cm近い幅の帯金を用いられている。覆輪については、江田船山古墳例は後胴上辺のみ鉄包覆輪が施されており、その他の部分は鉄折覆輪が施されている。カミノハナ3号墳例は、全周に鉄折覆輪が施されている。また、江田船山古墳例の後胴右脇部には特殊な覆輪施工がおこなわれている。すなわち、後胴右脇上端の押付板内面に小鉄板が鉄留されており、その端部が外面へ折り返されることで覆輪としているのである。この特殊な方法は、押付板上辺の鉄包覆輪と後胴中段地板端部が折り返された鉄折覆輪との間にできた覆輪の空白部分を埋めるために用いられた臨時的なものであろう。開閉装置は両短甲とも右前胴開閉式であり、蝶番板は前胴のみに取り付けられている。これらの諸特徴はいずれも新相の横矧板鉄留短甲に認められるもので、両短甲も新相の諸特徴を備えた横矧板鉄留短甲であると言える。

この両短甲の最大の特徴は、前胴が1段省略された、前胴6段構成をとることである。カミノハナ3号墳例は、報告書では、前後胴7段構成になっている[熊本大学文学部考古学研究室1982:p.19]が、検討の結果、6段構成であることが明らかになった[杉井編2009:pp.54-55]。この前胴6段構成となる横矧板鉄留短甲は、前胴7段構成の横矧板鉄留短甲の簡略化型式として捉えられており[小林1974・1991:p.159, 滝沢1986:p.69, 吉村1988:p.29など]、さらに橋本達也は「省力化の結果、行き着いた形態」との評価をしている[橋本2002:p.7]。これら前胴6段構成の横矧板鉄留短甲は、鉄数や覆輪など新相を示す横矧板鉄留短甲のみにみられ、同様の特徴を備える江田船山古墳、カミノハナ3号墳例も製作が簡略化された横矧板鉄留短甲であると評価できる。この前胴6段構成は従来、前胴上段帯金が省略された形態として理解されてきた。しかし、短甲は新相ほど帯金の上下幅が広がっていくと指摘されている。したがって、この前胴6段構成の横矧板鉄留短甲は帯金の幅広化にともなって、上段地板で充填されるべき空間が狭くなっていき、最終的に上段帯金と上段地板があった部分が1枚の鉄板によって形成されるようになったものと言える。このことは、新しく位置付けられる横矧板鉄留短甲の中に、帯金の幅広化によって、前胴上段地板の外見上の幅が著しく狭い例が見受けられることなどからも跡づけられるだろう。この板は、帯金が極限まで幅広化したもので

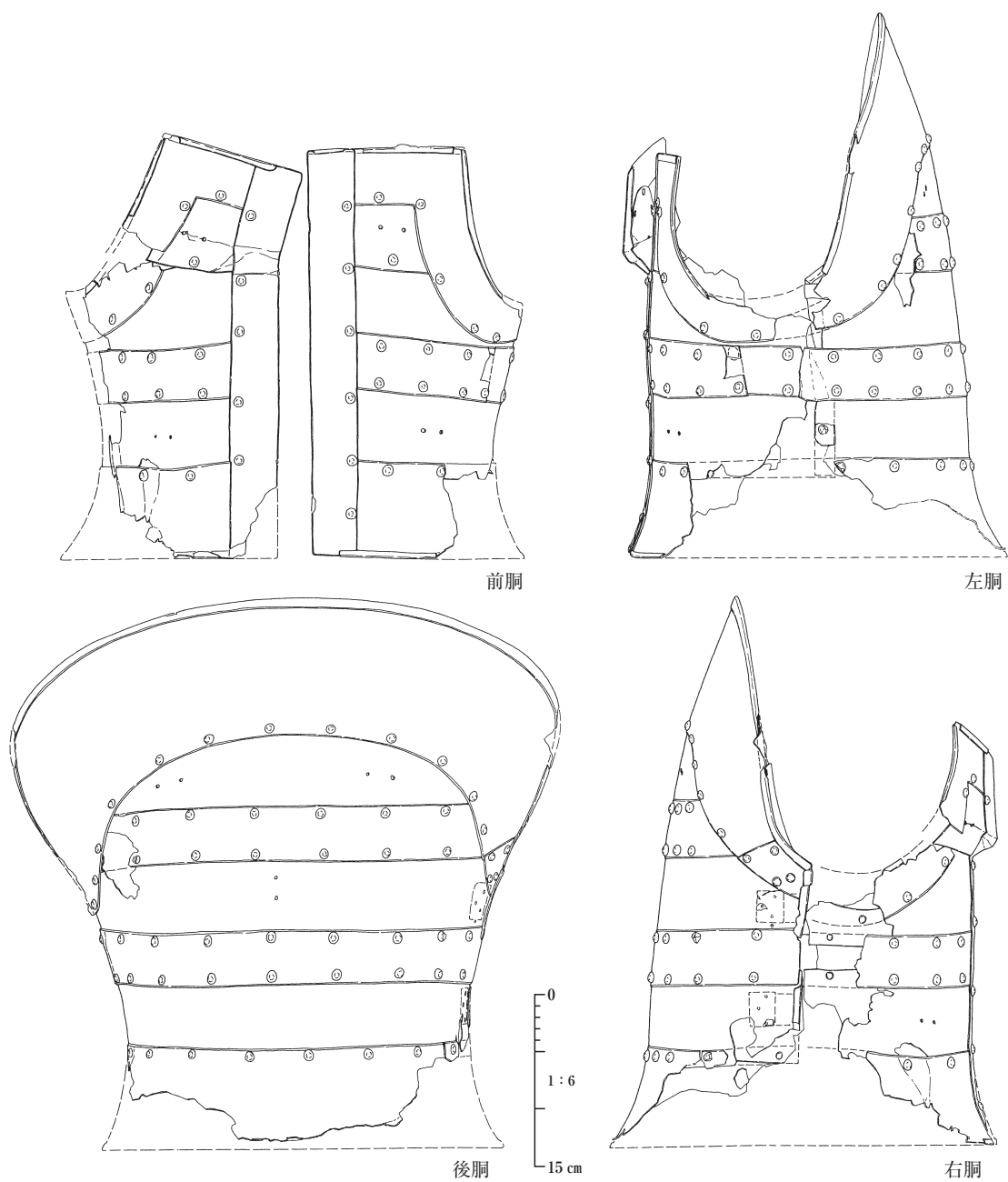


图6 江田船山古墳横矧板鉾留短甲実測図(外面)

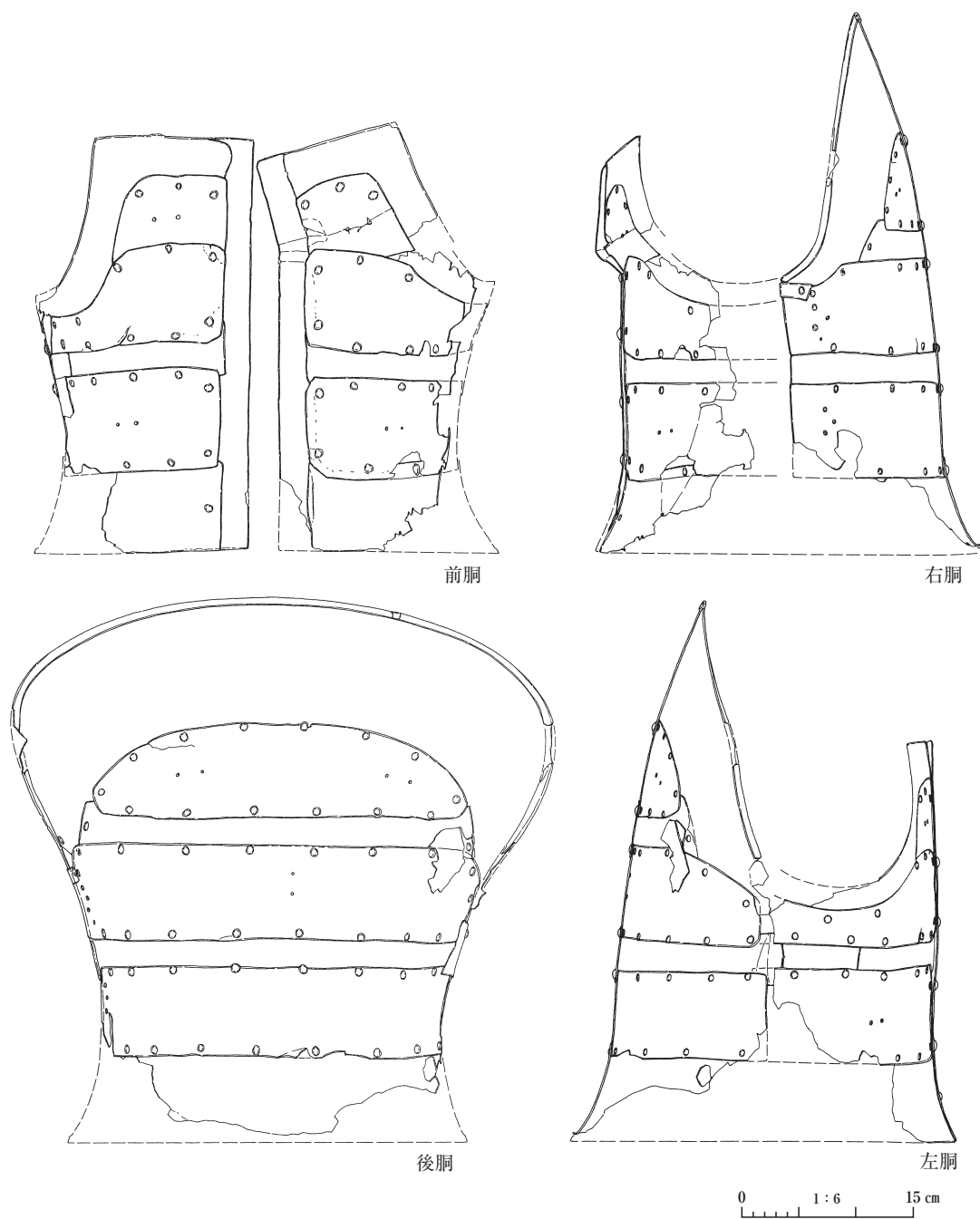


図7 江田船山古墳横矧板鉄留短甲実測図(内面)

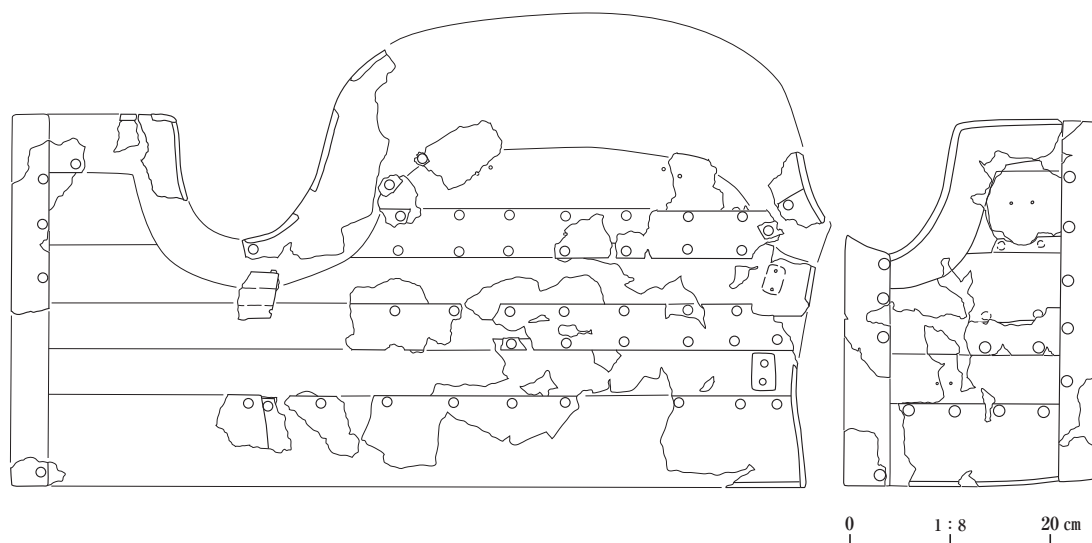


図8 カミノハナ3号墳横矧板鉾留短甲展開図

あるので、地板ではなく、また、形態的にも機能的にも帯金という名も相応しくない。そこで、その部位から、仮に「上段板」と呼称しておくことにする。

各鉄板接合のための鉾配置は、江田船山古墳例が、短甲本体と引合板が接合される部分では帯金を避ける鉾配置（滝沢分類C類）、押付板と帯金・地板が接合される部分が帯金中央に鉾が打たれる鉾配置（滝沢分類a類）であり、カミノハナ3号墳例が、引合板部分で各段中央に鉾が打たれる鉾配置（滝沢D類）、押付板部分では、江田船山古墳同様に帯金中央に鉾が打たれる鉾配置（滝沢分類a類）である。いずれも二枚留を避ける鉾配置である。この滝沢分類a類の鉾配置は上述の伝左山古墳、マロ塚古墳例の検討の中で、新相を示す横矧板鉾留短甲に製作の簡略化を目的として採用されていることを想定した。その2領よりさらに製作が簡略化されたと考えられる江田船山古墳、カミノハナ3号墳例にも押付板部分にa類配置が用いられていることは、やはり上述の想定を支持するものであろう。

地板形状についてみると、江田船山古墳例には輪郭の不整形な地板が用いられている。特に、左前胴上段板はかなり丸みを帯びた形状をしており、地板の設計、成形にあたって、堅上板や引合板などで形作られる空間形状が考慮されていないことがうかがえる。カミノハナ3号墳例は、小片であるために地板全体の形状をうかがえるものがないが、残存している地板の観察から、江田船山古墳と同様に輪郭の不整形な地板形状であったと考えられる。したがって、両短甲は地板の製作に関しての設計の厳密さを失っているものと考えられる。カミノハナ3号墳例の前胴地板引合板側の端辺には角が作りだされているが、これは、滝沢が示しているように〔滝沢2008：p.18〕隅丸の地板が用いられている短甲群との志向性の差異が表現されているものである可能性も考えられよう。

また、この両短甲の特徴として、後胴押付板右脇部に小鉄板が継ぎ足されていることがあげられる。短甲にみられる小鉄板についてはいくつかの言及がある〔古谷1996：p.66、阪口1998：p.17、滝沢2008：pp.18-21〕。中でも滝沢は、小鉄板が用いられる部位を整理し、他の属性との関連性を示している点で注目できる。このうち、後胴押付板右脇部に小鉄板が用いられる例は、長方形2鉾形式の短甲群との関連性が示されており、カミノハナ3号墳例はこれに該当する。しかし、江田船山古

墳例は方形3鉾形式の蝶番金具が取り付けられている。このことは、先学の多くが指摘するとおり、甲冑製作において、製作技法上の様々な情報が複数の近しい製作集団間で共有されていたことを示すものかもしれない。

この両短甲は、鉾径や、覆輪など最も新しい段階の横矧板鉄留短甲にみられる諸特徴を備えている。さらに、前胴を1段省略する段構成や、地板の形状、江田船山古墳例にみられる特殊な覆輪施工など、製作の簡略化のために、基本的な製作の規範から逸脱した形態のものであると評価できる。したがって、この両短甲は、鉄留短甲製作の最終段階に製作されたものと評価することができ、古墳時代中期末、須恵器型式ではTK23～47型式期に位置付けられよう。滝沢編年に照らし合わせるならばⅡc式となる。

小結 熊本地域出土鉄留短甲の位置付け

これまでの検討から、熊本地域の鉄留短甲は以下のように位置付けられた。上生上ノ原4号墳出土の三角板鉄留短甲は古相を示し、鉄留技術導入後さほど時期を経ない時期に位置付けられた。伝左山古墳、マロ塚古墳出土の横矧板鉄留短甲は、形態的、製作技術的にも安定した様相がみとめられ、製作の簡略化が進んだ様相から鉄留短甲の中でも新しく位置付けられた。江田船山古墳、カミノハナ3号墳出土の横矧板鉄留短甲は、製作簡略化の末、基本的な段構成すら変化させたもので、鉄留短甲製作最終段階に位置付けられた。

帯金式鉄留短甲は古墳時代中期中葉から中期末までという短期間に製作が簡略化され、その製作が終焉を迎える遺物である。それゆえに遺物の観察から看取できる製作の簡略化は比較的短期間で達成されたものと考えられる。そのような観点からしても、上生上ノ原4号墳の三角板鉄留短甲は、今回検討した5領のなかで唯一多鉾式になると思われるものであり、覆輪の特徴、構造などから、他の4領よりも古く位置付けられるものである。そのほかの、伝左山古墳、マロ塚古墳、江田船山古墳、カミノハナ3号墳の横矧板鉄留短甲は、短甲の構造や覆輪などから、製作の簡略化の度合いについて差がみられる。しかし、鉾数や、帯金幅など共通する要素も多く、滝沢編年に照らし合わせた場合、すべてⅡc式という同一型式内に包括されることから、これら4領の短甲は比較的近い時期に製作されたものと考えられる。

今ここで、小片であるなどの理由のために諸属性の検討ができなかった鉄留短甲についてみてみたい。石ノ室古墳からは、鉄留短甲の帯金片が出土している。この帯金片にみられる鉾は直径が9mmである。人吉市鬼塚古墳からは、短甲の裾板片が出土している。裾板片には鉄包覆輪が施されている。鬼塚古墳は追葬を含め5世紀第4四半期に位置付けられている。高塚横穴群からは横矧板鉄留短甲が出土している。その詳細はまったく不明であるが、横穴墓という墓制の成立時期、同一群内に存在する横穴の玄室構造などから見ても5世紀後半以降であると考えられるだろう。

以上から、熊本地域から出土した鉄留短甲は、そのほとんどが鉄留短甲製作の後半から最終段階、すなわち古墳時代中期後葉に位置付けられるといえる。次節では、中期後葉の鉄留甲冑出土古墳のあり方や、その他様相を合わせて検討することで、熊本地域の鉄留甲冑出土古墳の意義について考察してみたい。

②……………熊本県地域における鉾留甲冑出土古墳の様相

前項で熊本地域においては古墳時代中期後葉に甲冑出土古墳が最も多くみられることがわかった。帯金式甲冑と呼ばれる古墳時代中期の甲冑はヤマト政権による一元的生産がなされ、政治的、社会的紐帯の証として各地域の首長に配布されたとの前提に立てば、熊本地域において中期後葉に甲冑出土古墳が多くみられるようになることは、この時期に、熊本地域とヤマト政権との関係が何らかの形で強くなったことを示すものに他ならない。

また、その背景には、ヤマト政権側、地域側、あるいは双方向の意図が存在していることは疑いなく、それを明らかにするためには、まず甲冑出土古墳自身の様相を把握する必要があるだろう。その後、地域内の諸様相や周辺地域との比較をおこなっていかなければならないだろう。ここでは、まず熊本地域における鉾留甲冑出土古墳の様相を概観する。

1 鉾留甲冑出土古墳の分布

熊本地域における甲冑出土古墳の分布を示したものが図9・表2である。鉾留甲冑出土古墳の分布状況を、その他の甲冑出土古墳の分布状況と比較するため、鉾留甲冑以外の甲冑出土古墳の分布についても示している。この図から読み取れる革綴甲冑、挂甲出土古墳の分布状況と合わせて、鉾留甲冑出土古墳の分布における特徴を確認する。

革綴甲冑出土古墳は、合志川流域、緑川中流域、天草北部島嶼域、八代海沿岸というかなり限られた地域のみにもみられ、甲冑出土古墳は各地域に1基存在する程度の分布状況を示している。そのような中であって、緑川中流域での甲冑出土古墳の集中には注目できる。挂甲出土古墳は氷川下流域の野津古墳群に集中するが、そのほかは、菊池川中流域に挂甲が出土したといわれる白塚古墳、金屋塚古墳がみられる程度である。また、船載品の可能性がある蒙古鉢形冑、挂甲、襟甲、不明甲が出土している檜崎山5号墳〔清水・高橋1998、松崎・美濃口2010〕が、5世紀後葉に熊本平野の沿岸部にみられる⁽²⁾。

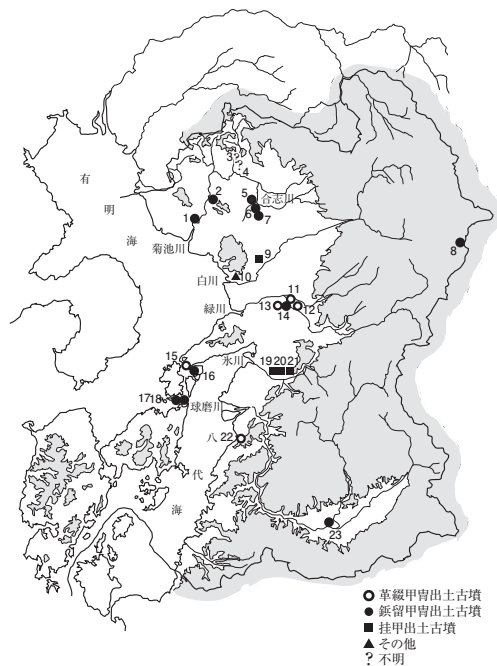


図9 熊本地域甲冑出土古墳分布図

これらと比べて、鉾留甲冑出土古墳は、その分布地域が広域に及んでいることがわかる。鉾留甲冑出土古墳は、菊池川下流域、合志川流域、緑川中流域、天草北部島嶼域、そして、内陸部の阿蘇地域、人吉盆地など、熊本県内各地域にその分布が及んでいる。ただし、分布域は拡大するものの、熊本地域全体に普遍的に存在するわけではなく、特定地域に偏った分布状況であることはその他の甲冑出土古墳の分布状況と変わらない。

表2 熊本地域甲冑出土古墳一覧表

番号	古墳名	所在地		墳形・規模	内部主体	甲冑・付属具				
						冑	甲	頸	肩	他
1	伝左山古墳	菊池川下流域	玉名市繁根木	円墳・35m	横穴式石室	小札鉄留眉庇付冑 小札鉄留眉庇付冑	横板鉄留短甲	1		臑当1
2	江田船山古墳	菊池川下流域	玉名郡和水町江田	前方後円墳・62m	横口式家形石棺	横板鉄留衝角付冑	横板鉄留短甲 横板革綴短甲	1	○	鍔3
3	白塚古墳	菊池川中流域	山鹿市石	円墳・28m	横穴式石室	?	?	?	?	?
4	金屋塚古墳	菊池川中流域	山鹿市石	?	?	?	?	?	?	?
5	慈恩寺経塚古墳	合志川流域	鹿本郡植木町米塚	円墳・53m	舟形石棺	眉庇付冑	三角板革綴短甲?	—	—	鍔
6	マロ塚古墳	合志川流域	鹿本郡植木町?	円墳?・15m?	?	小札鉄留眉庇付冑 小札鉄留眉庇付冑 小札鉄留衝角付冑	横板鉄留短甲	3	○	鍔2
7	上生上ノ原4号墳	合志川流域	合志市上生	円墳・10m	箱式石棺	眉庇付冑? (痕跡)	三角板鉄留短甲	—	—	—
8	高塚横穴群	阿蘇地域	阿蘇郡高森町	横穴墓	横穴墓	—	横板鉄留短甲	—	—	—
9	釜尾古墳	白川下流域	熊本市釜尾	円墳・13m	横穴式石室	—	挂甲	—	—	—
10	櫛崎山5号墳	白川下流域	熊本市小島下町	円墳・17m	横穴式石室	蒙古鉢形冑	挂甲 不明甲	—	—	襟甲
11	秋只古墳	緑川中流域	上益城郡御船町豊秋	?	竪穴式石室?	—	? 革綴短甲	—	—	—
12	小坂大塚古墳	緑川中流域	上益城郡御船町小坂	円墳・31m	横穴式石室	冑?	長方板革綴短甲	—	—	—
13	將軍塚古墳	緑川中流域	上益城郡城南町塚原	円墳・25m	横穴式石室	—	長方板革綴短甲	—	—	—
14	石ノ室古墳	緑川中流域	上益城郡城南町塚原	円墳・20m	横口式家形石棺	—	? 鉄留短甲	—	—	—
15	清水乙古墳	天草北部島嶼域	宇城市三角町磯山	?	箱式石棺	—	鍔	—	—	—
16	鬼塚古墳	天草北部島嶼域	宇城市三角町戸馳	円墳?・14m?	横穴式石室	小札鉄留眉庇付冑	三角板革綴短甲?	—	—	鍔
17	カミノハナ1号墳	天草北部島嶼域	上天草市松島町合津	円墳・13m	横穴式石室	? 鉄留冑	—	—	—	鍔
18	カミノハナ3号墳	天草北部島嶼域	上天草市松島町合津	円墳・12m	横穴式石室	—	横板鉄留短甲	—	—	—
19	物見櫓古墳	氷川下流域	八代郡氷川町野津	前方後円墳・62m	横穴式石室	—	挂甲	—	—	—
20	中ノ城古墳	氷川下流域	八代郡氷川町野津	前方後円墳・102m	横穴式石室	—	挂甲	—	—	—
21	中ノ城西古墳	氷川下流域	八代郡氷川町野津	?	?	—	挂甲	—	—	—
22	田川内1号墳	球磨川下流域	八代市日奈久新田町	円墳・34m	横穴式石室	—	? 革綴短甲	1	○	—
23	鬼塚古墳	人吉盆地	人吉市願成寺町	円墳・24m	横穴式石室	—	? 鉄留短甲	—	—	—

2 鉄留甲冑出土古墳の墳形・規模

古墳時代各時期ごとの甲冑出土古墳の墳形・規模のあり方に関してはすでに多くの研究がある。それらによると、古墳時代中期後半には、中小規模円墳への甲冑副葬例が著しく増加することが指摘されている [藤田 1988 : p.457, 滝沢 1994 : p.201 など]。

熊本地域においても、その傾向に合致した状況がみられる。上生上ノ原4号墳、カミノハナ1号墳、カミノハナ3号墳、三角町鬼塚古墳は10m台の小規模円墳であるし、高塚横穴のように横穴墓への副葬もみられる。熊本地域の鉄留甲冑出土古墳11基中、約半数が小規模墳にあたる。直径20m台の石ノ室古墳、人吉市鬼塚古墳を加えるならば、全体における小規模墳の割合はさらに増加する。ただし、各古墳が所在する地域内で比較したとき、カミノハナ1号墳、カミノハナ3号墳などは群内で最も大型の古墳に位置付けられる点などには注意が必要であろう。

その他、地域内で首長墳に位置付けられるような、全長62mの前方後円墳である江田船山古墳、直径35mの伝左山古墳などにも甲冑が副葬されていて、熊本地域では幅広い階層への甲冑副葬がみとめられることも特徴の一つとしてあげられる。

3 甲冑の複数保有

先述のように、甲冑がヤマト政権と地域の政治的、社会的関係を示す文物であるならば、甲冑の保有のあり方の差異にもヤマト政権との関連性の強弱が反映されているものと考えられる [田中晋 1981・1991 : p.341, 藤田 1988 : p.425 など]。古墳時代中期後半における甲冑の保有のあり方は、

短甲1領のみというあり方が最も多いが、九州においても、多くが1古墳短甲1領出土という傾向を示す。

熊本地域においても、1古墳短甲1領副葬がみられるが、複数埋納墳が多いことに注目される。熊本地域において、甲冑が複数出土した古墳には、菊池川下流域の江田船山古墳、伝左山古墳、合志川流域のマロ塚古墳がある。天草北部島嶼域のカミノハナ古墳群には、群中の1号墳と3号墳にそれぞれ甲冑が副葬されており、こちらも注目される。九州内での中期後葉の甲冑複数埋納墳はこれらの他は、筑後川中流域の塚堂古墳、八女地域の真浄寺2号墳、一ツ瀬川下流域の西都原4号地下式横穴、宮崎平野大淀川下流域の下北方5号地下式横穴、本庄所在地下式横穴に限られており、熊本地域への甲冑複数埋納墳の集中が指摘できる。

橋本達也は甲冑の量、質などによって緩やかな序列関係が存在したことを指摘している〔橋本2007：p.50〕。その点から見ると、複数埋納墳が多くみられる熊本地域、特に菊池川下流域は、当該時期においてヤマト政権との緊密な関係の下、周辺地域に対して優位な立場にある勢力であったと判断できるだろう。

その他に、中期後葉には、著しく甲冑出土古墳が集中する地域が存在する。最も顕著な集中がみられる地域は、宮崎県南部内陸部に位置するえびの盆地である。この地域では、えびの市島内地下式横穴群、小木原地下式横穴墓群中の8基もの地下式横穴墓から甲冑が出土している。ただし、これほどの甲冑の集中をみながら複数埋納墳はみられない。このあり方から、当地域への甲冑集中現象は、複数埋納古墳所在地域と異なる意味合いを持つものと思われる。

小結 熊本地域における鋳留甲冑出土古墳の様相

熊本地域には中期後葉に最も甲冑出土古墳が集中する。これらの甲冑出土古墳の分布、墳形・規模、甲冑複数埋納墳といった要素の検討をおこなった。この結果、中期後葉の熊本地域では幅広い階層の古墳に甲冑が副葬されていること、当該時期の九州内においても最も甲冑が集積する地域の一つであることが明らかになった。このことは、当地域が中期後葉においては、周辺地域と比較して多くの甲冑配布を受けることができた有力な地域であったということができよう。そして、このような優位性を持つに至るには、何らかの背景が存在していたと考えるのが妥当である。

③……………熊本地域における鋳留甲冑配布の背景

熊本地域における中期後葉の甲冑出土古墳集中の背景を理解するためには、甲冑出土古墳を取り巻く地域内の諸様相を合わせて検討する必要がある。ここでは、大型古墳築造、埴輪、渡来系文物について検討をおこない、そこから、中期中葉に熊本地域へ多くの甲冑がもたらされたことの背景について考察したい。

1 大型古墳築造地の変遷との関係

熊本地域における大型古墳の動向に関する研究は、数人の研究者によって検討がなされている〔甲元1995、宮崎1995、高木・蔵富士1998、杉井2004・2010、木村2007など〕。それぞれ個々の古墳に関

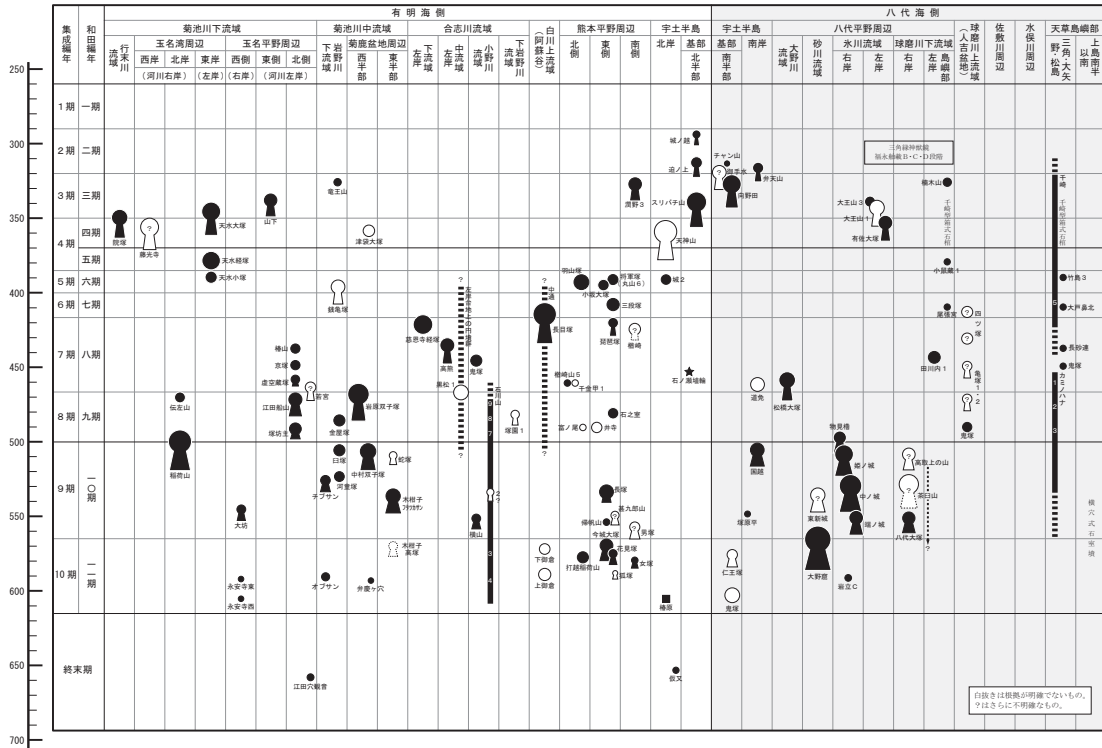


図10 熊本地域大型古墳の動向

して小異はあるものの、大枠での変遷観は合致していると見てよい。今ここで熊本地域における大型古墳の動向についての検討はできないため、自身の変遷観に最も近い杉井の変遷観を参考に、鉄留甲冑と関係する中期古墳の動向について簡単に整理しておく(図10)。

中期前葉の大型古墳築造地域は菊池川下流域湾岸部、宇土半島基部地域であり、前期後葉の様相を引き継いだ状況を示している。大型古墳の築造地域が変化するのは中期中葉で、これまで大型古墳がみられなかった、合志川流域、菊池川中流域、白川上流の阿蘇谷、そして、緑川中流域に大型古墳が築造されるようになる。中期前葉まで大型古墳の築造地域であった、菊池川下流域湾岸部、宇土半島基部地域では、それに対応するかのよう、築造される古墳の規模が縮小、停止している。その後、中期後葉にも、大型古墳築造地の変化を見出すことができ、菊池川下流域に大型古墳の築造がおこなわれるようになり、人吉盆地にもこの時期に前方後円墳が築造されようになる。また、大型古墳は築造されないが、天草北部島嶼域においても古墳の築造が活発になることは注目してよい。それまで、大型古墳が築造されていた合志川流域、菊池川中流域、阿蘇谷、緑川中流域では前方後円墳などみられるものの、相対的に規模が縮小する傾向がある。

この古墳時代中期の熊本地域における大型古墳築造地の変化と甲冑出土古墳の動向を合わせてみると、両者に関連性があることがわかる。すなわち合志川流域、緑川中流域に大型古墳が築造される中期中葉には、合志川流域に慈恩寺経塚古墳、上生上ノ原4号墳、緑川中流域には小坂大塚古墳、將軍塚古墳という甲冑出土古墳が現れる。また、菊池川下流域に大型古墳が築造される中期後葉には、江田船山古墳、伝左山古墳に甲冑が副葬されている。また、この時期に古墳の築造が活発

になる天草北部島嶼域にはカミノハナ1号墳、カミノハナ3号墳に、人吉盆地には鬼塚古墳に甲冑が副葬されている。

以上から、大型古墳の築造開始と、甲冑出土古墳の出現、時期、地域が一致していることがわかり、甲冑がもたらされることと、大型古墳築造に密接な関連があったことが想定される⁽³⁾。

2 円筒埴輪の様相

埴輪は、古墳の表飾物であり、古墳祭祀にかかわるものである。この祭祀や埴輪の製作技術を生み出したのは、ヤマト政権であり各地へと展開していく。その埴輪の展開のあり方には地域ごとに差があるが、この差が社会的な関係などを一定程度反映している可能性があり、各地域における埴輪の樹立の有無や、製作された埴輪の技法上の特徴などには、何らかの地域間関係が見出されることが予想される。熊本地域での埴輪の様相については、竹田宏司、竹中克繁らによる研究があり〔竹田2000、竹中2003〕、これらの研究にもとづいて古墳時代中期における熊本地域の埴輪の動向と甲冑出土古墳との関係について検討する。

古墳時代中期の熊本地域において、円筒埴輪樹立古墳の分布はいくつかの地域に限られている(図11)。その地域とは、諏訪川流域、菊池川下流域、菊池川中流域、合志川流域、阿蘇谷、緑川中流域、天草北部島嶼域である。このうち、中期中葉に円筒埴輪を持つ古墳が出現するのは、諏訪川流域、菊池川中流域、合志川流域、阿蘇谷、緑川中流域である。そして、中期後葉には菊池川下流域、天草北部島嶼域に円筒埴輪樹立古墳がみられるようになる。

この円筒埴輪樹立古墳のありかたと、甲冑出土古墳の動向を重ね合わせると以下のことが言える。それは、分布域が重複している地域が多く、さらに出現時期も重なっていることである。甲冑出土古墳自身が埴輪を持つ場合もあり、中には合志川流域の慈恩寺経塚古墳のようにその地域における

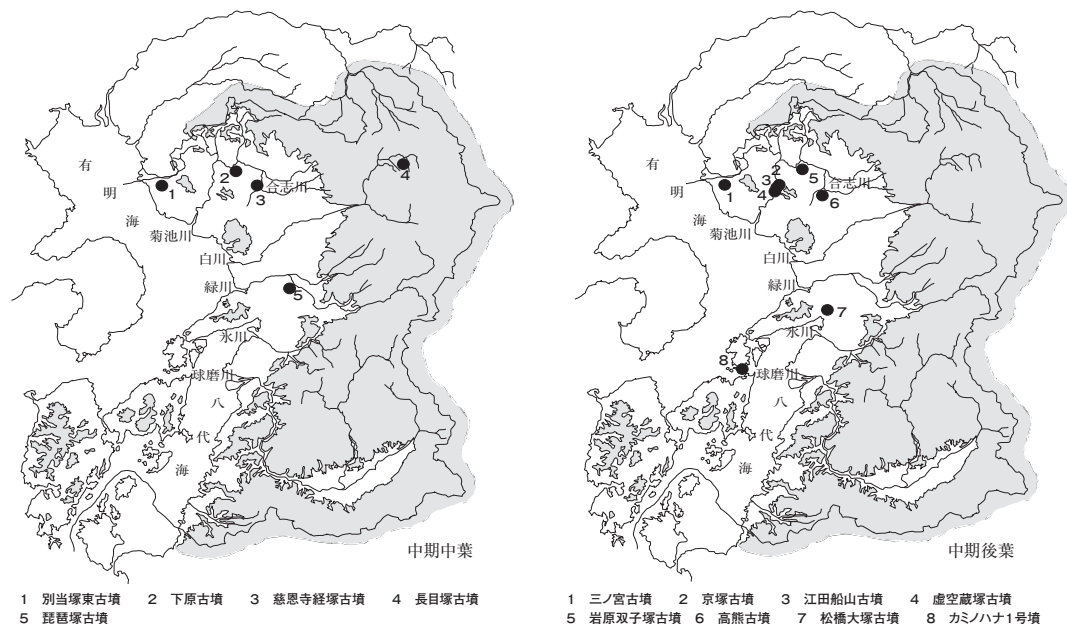


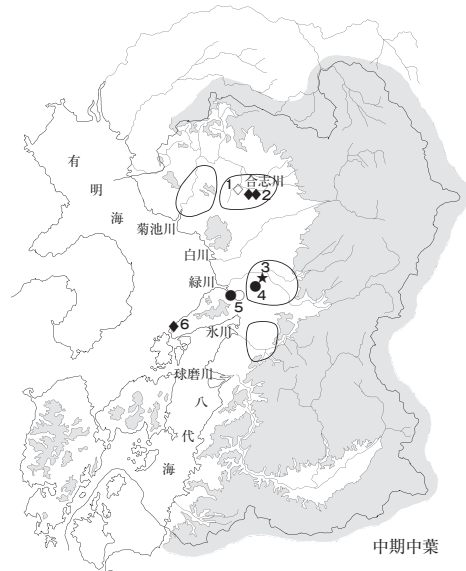
図11 古墳時代中期における熊本地域円筒埴輪分布図

最初の埴輪樹立古墳である場合や、天草北部島嶼域のカミノハナ1号墳のようにその地域で唯一の埴輪樹立古墳となるものも存在し、甲冑出土古墳と埴輪樹立古墳との関連性を想起させる。

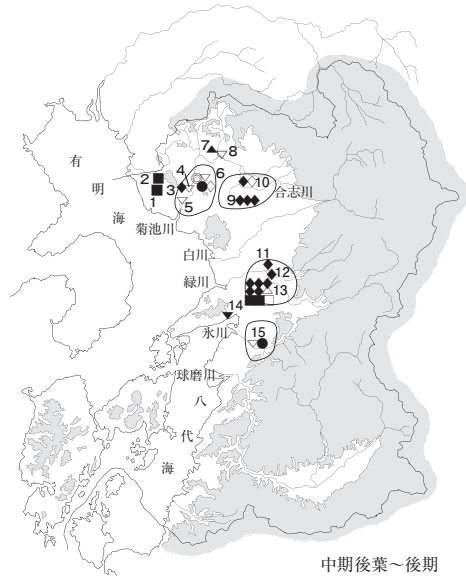
また、竹中は、熊本地域の埴輪の様相として、熊本平野をはさんだ南北地域で埴輪のあり方が異なることを指摘している。熊本県北部では中期後葉以降、外面2次調整B種ヨコハケが施された精美な円筒埴輪がみられるようになるのに対し、南部地域ではB種ヨコハケは採用されず、稚拙で、独自性の高い埴輪が製作されるとしている。この2次調整B種ヨコハケの採用、不採用の差を竹中は、地域性の問題として捉えているが、甲冑が出土した古墳の多寡という現象を踏まえれば、この地域性はヤマト政権との関係性の強さの差による各地域間の埴輪製作技術に関する情報の入手機会の差によって生まれたものであると考えられる。ただし、2次調整B種ヨコハケが直ちにヤマト政権に結びつくものではなく、このような埴輪製作技術を情報として入手できたということが、その地域を考える上で重要となる。加えて、人吉盆地には甲冑出土古墳が分布しているにもかかわらず埴輪が確認されていない地域である。

3 渡来系文物の所在

古墳時代中期は、文物、技術、生活様式など多岐にわたる渡来系文化がもたらされた時期にあたる。この新来の渡来系文化の大規模な流入は、渡来人の存在を抜きには想定できない。この渡来人や渡来系文化の動向をヤマト政権がすべてを把握していたとは考えにくい。古墳時代中期中葉以降の近畿地域での渡来人の存在をうかがわせる遺構、遺物が急激に増加することには注意しなければならない。この新しい先進技術である渡来系文



1上生ノ原4号墳 2八反原遺跡 3迎原西遺跡 4塚原15号方形周溝墓
5石ノ瀬遺跡 6小田良古墳



1野原7号墳 2北屋敷遺跡 3馬出古墳 4大坊古墳 5伝左山古墳
6江田船山古墳 7馬塚古墳 8臼塚古墳 9八反原遺跡 10石川山9号墳
11二子塚遺跡 12長塚古墳 13塚原古墳群 14園越古墳 15物見槽古墳

凡例
 陶質土器:● 軟質土器:○ 皮袋土器:□ その他土器:■
 鍛冶道具:△ 鉄 滓:▲ 装身具:▽ 馬 埋 葬:◆
 馬 具:◇ カマド:★ 武器:◎ 銅 椀:▼

図12 熊本地域渡来系文物分布図

化受容のあり方も何らかの地域間関係が反映されている可能性が高い。

熊本地域における古墳時代の渡来系文物の様相については筆者による検討がある。筆者は、熊本地域の渡来系文物受容のあり方をAパターン、Bパターンの二つに分類した。Aパターンは、渡来系文物の受容開始時期が中期中葉で、初期カマドや、鍛冶道具、馬の埋葬など生活、生産や儀礼にかかわるもの、Bパターンは、受容開始時期が中期後葉から後期前葉で、装身具などが首長墓といえる古墳の副葬品として見られるものとした〔西嶋2005：p.86〕。

この渡来系文物のあり方と、甲冑出土古墳の動向にも時間的、空間的な関連性がうかがえる。この渡来系文物受容Aパターンにあてはまる地域は、合志川流域、緑川流域である。合志川流域では、甲冑が出土した上生上ノ原遺跡の1号石棺、2号石棺からは轡が出土している。その他、八反原遺跡では、5基の円墳の周溝内から、馬歯や馬具が出土しており、馬匹に関する遺構、遺物が、中期中葉以降に出現する。緑川流域では、上の原遺跡から軟質土器が出土し、迎原西遺跡からカマドが検出され、また、塚原15号方形周溝墓周溝内からは陶質土器が出土している。これらは中期中葉に位置付けられるものである。その他、やや時期は下がるが、塚原古墳群内の円墳周溝内から鉗、把手付土器が出土している。また、合志川流域と同様に、馬埋葬にともなう馬歯、馬具が多く検出されている。これらの地域での渡来系文物の受容開始時期は、当該地域での甲冑出土古墳の出現時期と重なっている。

渡来系文物受容Bパターンにあてはまる地域は、菊池川下流域、氷川下流域である。氷川下流域は今回対象とする時期のものではないので、ここでは省略する。菊池川下流域で認められる渡来系文物で最も古いものは伝左山古墳で出土した金製垂飾付耳飾で、中期後葉に位置付けられる。その他、金銅製品や、陶質土器など豊富な副葬品が出土した江田船山古墳や、銀製垂飾付耳飾、金製垂飾付耳飾が出土した大坊古墳など、地域内の首長墓といえる規模の古墳の副葬品として渡来系文物がみられる。この地域での渡来系文物受容開始時期も、甲冑出土古墳出現時期と重なっており、かつ、甲冑出土古墳自身の副葬品中にも渡来系文物が含まれている。特に江田船山古墳の副葬品は質、量ともに抜きん出た存在で注目できる。

小結 熊本地域における鉾留甲冑配布の背景

前項で、甲冑出土古墳の分布から、熊本地域では甲冑出土古墳が特定地域に偏在する傾向があること、九州の中でも甲冑出土古墳の集中する地域であることを確認した。そして、本項では、その背景を考察するために、大型古墳の動向、円筒埴輪、渡来系文物の様相を検討し、これらが甲冑出土古墳の動向と関連性を持つことが確認できた。また、各小地域において、甲冑の配布される時期、古墳の築造時期や、渡来系文物の受容時期などに若干の差異があることが明らかとなった。これらの動向は、各地域独自の動きとして理解されるものではなく、当時の中心地であったヤマト政権との関わりを含めた全国的な動向の中で捉えられていく必要がある。また、甲冑の配布される時期などに地域ごとで若干の差異があることはその背景についても異なったものがあることが想起される。したがって、以下では、これまでの検討をもとにしながら、甲冑出土古墳が集中する小地域ごとに、甲冑が配布されるにいたった背景について考察する。

菊池川下流域には中期後葉に甲冑がもたらされる。甲冑出土古墳は、いずれも複数埋納墳であ

り、当地域は同時期の九州内他地域と比較しても、甲冑が集積する地域の一つである。この時期に大型古墳の築造が開始され、首長墳の副葬品として、渡来系文物が受容されるようになる。このような、首長墳への渡来系文物の副葬、中でも豊富な渡来系文物が副葬されていた江田船山古墳の存在は、当地域の勢力が朝鮮半島との交渉に深くかかわっていたことを示すものだろう。これらの活動の結果、ヤマト政権から多くの甲冑の配布を受けるにいたったものと解釈できる。この地域の勢力が、5世紀後半から朝鮮半島との交渉を主体的に担っていたということは、すでに指摘がある〔白石2002：p.267〕。2次調整B種ヨコハケなどの埴輪の製作技術を導入し得たのも、その関係の緊密さや、対外活動にともなう各地域との交流にもとづくものであろう。また、独立片逆刺長頸鏃は朝鮮半島南部とのつながりを持った人物が手にしたとされる〔鈴木2003：p.15〕。このような鉄鏃が当地域に分布していることもこのことを支持する要素としてあげられる。

合志川流域には中期中葉から甲冑出土古墳が出現する。当地域では、この時期に渡来系文物、とりわけ馬に関わる遺構、遺物が顕著になる。列島内で同様の状況を示す地域は、長野県の伊那谷がある。この地域も馬埋葬や馬具が集中する地域であり、中期中葉以降、特に中期後葉に甲冑出土古墳が集中する。この状況について高橋克壽は「倭王権の要請で、馬匹生産の進行とその副産物としての耕地開発などが推し進められたこと」を想定しており〔高橋2007：p.31〕、筆者は合志川流域における中期中葉以降の状況も、このようなヤマト政権による地域振興策という動きのなかで捉えうることを指摘している〔西嶋2010：p.628〕。また、杉井健は、中期中葉から後葉にかけて河川づたいの内陸ルートが整備されたとし、当地域もそのルート上にあることを指摘している。そして、これら地域に渡来系文物が多くみられることから、このルートを整備した主体は中央政権であった可能性が高いとする〔杉井2010：p.143〕。中期中葉以降は、2次調整B種ヨコハケが施された円筒埴輪や、独立片逆刺長頸鏃がみられるなど菊池川下流域と同様の状況がみられるようになり、立地的に近接する菊池川下流域とのつながりのなかで、朝鮮半島への対外活動に加わっていたことがうかがわれる。このことが、マロ塚古墳のような複数埋納墳が出現する契機となったと考えられる。

緑川流域についても、中期中葉から甲冑出土古墳が出現する地域である。当地域も合志川同様に馬に関わる遺構、遺物や、生活、生産に関わる渡来系文物が多くみられることから、合志川流域と同様の理由で当地域へ甲冑が多くもたらされることになったものと考えてよいだろう。加えて、当地域への中期中葉における甲冑の集中は、その立地も考慮に入れる必要があるだろう。当地域は、中期前葉まで大型前方後円墳が築造されていた宇土半島基部地域と近接する地域にあたる。古墳時代中期以降の大型前方後円墳の築造地の変化が政治的な変動によるもの〔白石1969、和田1987：pp.50-51、都出1988：pp.13-14〕であり、各地域での古墳築造地の変化もその影響によるものならば、この宇土半島基部地域の前方後円墳築造の停止と緑川流域での首長系譜の出現も無関係ではないものと思われる。つまり、中期において最も大規模な前方後円墳を築造する河内平野の勢力が、それ以前に最も勢力のあった大和地域との関係が深かった宇土半島基部地域以外の地域とのつながりを新たに創出し重視した結果が当地域へ甲冑がもたらされ、新来の渡来系文物が受容される契機となったと考えられる。中期後葉になると、当地域の甲冑出土古墳が減少することは、この時期に菊池川下流域が重視されるようになった結果、この地域の勢力が相対的に低調になるものと考えられる。円筒埴輪に2次調整B種ヨコハケが無く、独自性の強い埴輪がみられるのも、中央政権や周

辺地域とのつながりがやや希薄になっていたことに関係しているものと考えられる。

天草北部島嶼域では、中期中葉から甲冑出土古墳がみられる。⁽⁴⁾当地域において甲冑と同様に注目される遺物として、独立片逆刺長頸鏃がある。このことから筆者は、当地域へ甲冑が配布されたことの背景として、上述した菊池川下流域同様に、朝鮮半島への対外活動があったことが指摘した。また、当地域には大型の古墳が築造されていないことや、甲冑の副葬が1古墳1個体のみであることなどから、当地域の勢力は朝鮮半島交渉の中心的役割を担った菊池川下流域勢力のもとで自らの海運力をもって活動に参加していた勢力ではないかと考えた〔西嶋2009：p.203〕。さらに、杉井は当地域が熊本平野からさらに南へ抜けるルートとして、天草島嶼部を下るルートの存在を重視している〔杉井2010：p.142〕が、こうした立地も当地域がヤマト政権から重視され、甲冑の配布を受けたことの背景として考えられる。

阿蘇谷、人吉盆地の内陸部では、中期後葉に甲冑出土古墳がみられるようになる。この内陸部への展開は、九州島内の東西を結ぶ陸路の要衝として、当該地域が重視されるに至ったことによるものと考えられるだろう。特に、人吉盆地は、東に甲冑が多量に集積するえびの盆地、さらに東には宮崎平野が控えており、これら地域と八代海、有明海沿岸地域を結ぶ交通路の要衝としての役割があったのではないだろうか。古墳時代中期中葉以降には、九州山地を横切り、九州西岸と東岸を結ぶルートも確立していったものと考えられる。この動きを踏まえれば、芦北地域の田川内1号墳などの存在についても理解することができる。

まとめ

熊本地域の鉾留短甲の位置付けから、熊本に最も多く甲冑がみられるのが中期後葉であることを指摘し、その背景を探るために、甲冑出土古墳の分布や古墳の墳形・規模や、地域内の大型古墳の動向、埴輪、渡来系文物などの様相を検討し、当地域へ甲冑がもたらされるにいたった背景について考察した。その結果菊池川下流域では朝鮮半島交渉との関わりが見出された。合志川流域では中期中葉にはヤマト政権の内陸ルート整備や地域振興政策による渡来系文物の導入、中期後葉には朝鮮半島交渉との関わりを見出すことができた。さらに、内陸ルート上に位置し、新興勢力としてヤマト政権と関係が深くなった緑川中流域や、海運力、交通の要衝であることから、菊池川下流域の勢力などに関わって朝鮮半島交渉などに参加したと思われる天草北部島嶼域、九州の東西を結ぶ交通の要衝としての役割が重視されたと思われる阿蘇谷や人吉盆地といった内陸地域など、地域ごとに多様な背景が存在することが見出された。

いずれの地域もヤマト政権との関係の中で甲冑が配布されたことには変わらないが、地域における甲冑受容の背景は多様であり、ヤマト政権による甲冑の配布は橋本も指摘する〔橋本2007：p.50〕ように、単一的な政策の下配布されたものではなく、ヤマト政権と地域間の多様な政治的、社会的関係のもとづいたものであったと言える。甲冑出土古墳を通して見た以上のような古墳時代中期中葉から後葉の熊本地域のあり方からは、新技術を用いた列島の内的発展と朝鮮半島との対外活動というキーワードが読み取れる。これらがヤマト政権との関わりの中で展開していくことを考えると、この二つのキーワードは古墳時代中期社会全体においても重要なキーワードであると言える。

ろう。今後、甲冑という遺物を軸にしなが、このような視点からさらに検討を重ねていきたい。

【謝辞】

本稿を作成するにあたって、本共同研究の皆様には大変多くのご助言、ご指導を賜りました。感謝申し上げます。また、以下の諸氏、機関からは資料調査、掲載についてご高配を賜りました。文末ではありませんが、記して感謝いたします（敬称略、50音順）。

甲元眞之、杉井健、野田拓治、美濃口紀子、熊本県教育委員会、熊本市立熊本博物館、熊本大学文学部考古学研究室

註

(1)——滝沢は、鉄配置について検討をおこない、2001年に新たな型式を再設定している。しかし、その型式設定にはやや疑問点もあり、今回は1991年論文を参考とした。

(2)——榑崎山5号墳出土甲冑を検討した清水・高橋は築造年代を6世紀代ととらえているが、報告文や、高木恭二による石障系石室の研究では、5世紀後葉から6世紀初めに位置付けられている。榑崎山5号墳の築造年代を5世紀後葉に求めた場合、清水・高橋が指摘するような、榑崎山5号墳出土甲冑が舶載品であるとした場合の、古墳築造年代との齟齬はある程度解消されるものと思わ

れる。また、近年、松崎らの検討により、挂甲の製作年代を5世紀中頃から後半とする位置付けがなされた。

(3)——中期中葉においてこれら地域以外に菊池川中流域、阿蘇谷にも大型古墳が築造される。この両地域の当該時期における古墳の内容は不明な点が多く検討できなかった。今後、資料の増加を待って検討したい。

(4)——三角町清水乙古墳から鎧が出土したとの記録がある。これに隣接する清水甲古墳から筒形銅器が出土しており、清水乙古墳が清水甲古墳と同時期のものであるならば、当古墳の時期が中期前葉までさかのぼる可能性もある。

引用・参考文献

- 甘木市教育委員会編 1979『小田茶臼塚古墳』甘木市文化財調査報告書第4集 甘木市教育委員会
 梅原末治 1939「在田村亀山古墳と其の遺物」『兵庫歴史蹟名勝天然記念物調査報告』第3輯
 木村龍生 2007「中九州における中期古墳の編年」『九州島における中期古墳の再検討』第10回九州前方後円墳研究会発表要旨・資料集 九州前方後円墳研究会, pp.161-181
 京都大学総合博物館編 1997『王者の武装—5世紀の金工技術—』京都大学総合博物館
 熊本大学文学部考古学研究室編 1982『カミノハナ古墳群 2』研究室活動報告14 熊本大学文学部考古学研究室
 慶南考古学研究所編 2000『道項里・末山里遺蹟』慶南考古学研究所
 小林謙一 1974・1975「甲冑製作技術の変遷と工人系統」『考古学研究』第20巻第4号、第21巻第2号 考古学研究会
 小林行雄 1982「古墳時代短甲の源流」『帝塚山考古学研究所設立記念 日韓古代文化の流れ』帝塚山考古学研究所
 甲元眞之 1995「古墳時代首長系譜の類型化—九州での事例的考察—」『西谷眞治先生古希記念論文集』勉誠社, pp.119-141
 齊藤 優 1979『改訂 松岡古墳群』松岡町教育委員会
 阪口英毅 1998「長方板革綴短甲と三角板革綴短甲—変遷とその特質—」『史林』第81巻第5号 史学研究会, pp.1-39
 清水和明・高橋工 1998「古墳時代の外来系甲冑資料について—福岡県塚堂古墳と熊本県榑崎山5号墳出土甲冑—」『大阪市文化財協会研究紀要』創刊号 大阪市文化財協会, pp.33-49
 白石太一郎 1969「畿内における大型古墳群の消長」『考古学研究』第16巻第1号 考古学研究会, pp.8-26
 白石太一郎 2002「倭と加耶の交流の歴史的意味」『古代東アジアにおける倭と加耶の交流』第5回歴博国際シンポジウム 国立歴史民俗博物館, pp.265-270
 杉井 健 2003『朝鮮半島系渡来文化の伝播・普及と首長系譜変動の比較研究』熊本大学文学部

-
- 杉井 健 2004 「熊本県地域における古墳時代中・後期の首長系譜変動にかんする覚書」『西日本における前方後円墳消滅過程の比較研究』大阪大学大学院文学研究科, pp.3-26
- 杉井 健 2005 「中央政権の外交政策と渡来人」『九州における渡来人の受容と展開』第8回九州前方後円墳研究会発表要旨集・資料集 九州前方後円墳研究会, pp.337-345
- 杉井健編 2009 『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究』熊本大学文学部
- 杉井 健 2010 「肥後地域における首長系譜変動の画期と古墳時代」『九州における首長系譜の再検討』第13回九州前方後円墳研究会発表要旨集 九州前方後円墳研究会, pp.131-184
- 鈴木一有 1996 「三角板系短甲について—千人塚古墳の研究(2)—」『浜松市博物館報—Ⅷ—』浜松市博物館, pp.23-41
- 鈴木一有 2003 「副葬鏃の変質」『武器生産と流通の諸画期』七世紀研究会シンポジウム 七世紀研究会, pp.11-25
- 鈴木一有 2005 「中八幡古墳出土短甲をめぐる問題」『中八幡古墳資料調査報告書』池田町教育委員会, pp.77-91
- 高木恭二 1994 「石障系横穴式石室の成立と変遷」『宮嶋クリエイト』第6号 宮嶋利治学術財団, pp.109-132
- 高木恭二・蔵富士寛 1998 「肥後における古墳文化の特質—筑後八女古墳群との比較—」『八女古墳群の再検討—周辺地域で、なにがおこったか—』発表要旨・見学会資料 九州前方後円墳研究会, pp.69-84
- 高橋克壽 2007 『金工技術から見た倭王権と東アジア』奈良文化財研究所
- 滝沢 誠 1986 「甲冑類の編年の位置と古墳の年代」『武者塚古墳』新治村教育委員会, pp.68-70
- 滝沢 誠 1991 「鋌留短甲の編年」『考古学雑誌』第76巻 第3号 日本考古学会, pp.16-61
- 滝沢 誠 1994 「甲冑出土古墳から見た古墳時代前・中期の軍事編成」『日本と世界の考古学—現代考古学の展開—岩崎卓也先生退官記念論文集』岩崎卓也先生退官記念論文集編集委員会 雄山閣, pp.198-215
- 滝沢 誠 2001 「多田大塚古墳群出土の短甲めぐって」『静岡県の前方後円墳—個別報告編—』静岡県文化財報告書第55集 静岡県教育委員会, pp.61-67
- 滝沢 誠 2008 『古墳時代中期における短甲の同工品に関する基礎的研究』静岡大学人文学部
- 竹田宏司 2000 「熊本県の埴輪」『九州の埴輪その変遷と地域性』第3回九州前方後円墳研究会発表要旨・資料集 九州前方後円墳研究会, pp.437-442
- 竹中克繁 2003 「円筒埴輪の地域性—熊本県地域の埴輪—」『先史学・考古学論究Ⅳ』考古学研究室創設30周年記念論文集 龍田考古会, pp.85-100
- 田中晋作 1981 「武器の所有形態からみた古墳被葬者の性格」『ヒストリア』第93号
- 田中新史 1975 「五世紀における短甲出土古墳の—様相—」『史館』第5号
- 田中新史 1978 「御嶽山古墳出土の短甲」『考古学雑誌』第64巻第1号 日本考古学会, pp.28-44
- 都出比呂志 1988 「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』第22号 大阪大学文学部, pp.1-16
- 西嶋剛広 2005 「肥後地域における渡来系文物の受容と展開」『九州における渡来人の受容と展開』第8回九州前方後円墳研究会発表要旨集・資料集 九州前方後円墳研究会, pp.86-97
- 西嶋剛広 2009 「天草北部島嶼域出土甲冑の検討」『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究』熊本大学文学部, pp.195-205
- 西嶋剛広 2010 「慈恩寺経塚古墳の検討」『先史学・考古学論究Ⅴ』甲元眞之先生退任記念 龍田考古会, pp.619-632
- 野上丈助 1968 「古墳時代における甲冑の変遷とその技術史的意義」『考古学研究』第14巻第4号 考古学研究会, pp.12-43
- 野上丈助編 1991 『論集武具』学生社
- 橋本達也 2002 「九州における古墳時代甲冑—総論にかえて—」『考古学ジャーナル』No. 496 ニューサイエンス社, pp.4-7
- 橋本達也 2004a 「眉庇付冑の分布とその背景—古墳時代中期後半の政権と地域—」『西南四国—九州間の交流に関する考古学的研究』愛媛大学法文学部, pp.211-222
- 橋本達也 2004b 「永浦4号墳出土副葬品の意義—甲冑・鉄鏃を中心として—」『永浦遺跡』古賀市教育委員会, pp.153-168
- 橋本達也 2007 「九州の中期甲冑」『九州島における中期古墳の再検討』第10回九州前方後円墳研究会発表要旨・資料集 九州前方後円墳研究会, pp.47-58
- 藤田和尊 1988 「古墳時代における武器・武具保有形態の変遷」『樫原考古学研究所論集』第8号 吉川弘文館, pp.425-527
-

- 古谷 毅 1996「古墳時代甲冑研究の方法と課題」『考古学雑誌』第81巻 第4号 日本考古学会, pp.58-85
- 松崎友理・美濃口紀子 2010「熊本県内における古墳時代の挂甲に関する研究—熊本市栢崎山5号墳出土小札の分析を中心に—」『熊本市立熊本博物館報告』No.22 熊本市立熊本博物館, pp.52-75
- 真野和夫 1976「竹田市扇森山横穴出土遺物」『大分県地方史』第84号
- 宮崎敬士 1995「肥後における前方後円墳の動向」『九州における古墳時代首長墓の動向』発表要旨資料 九州考古学会・宮崎考古学会合同学会実行委員会, pp.110-121
- 宮崎県総合博物館 1982『宮崎県総合博物館収蔵資料目録』考古・歴史編 宮崎県総合博物館
- 本村豪章編 1991『古墳時代の基礎的研究稿—資料編(Ⅱ)—』東京国立博物館研究紀要第26号 東京国立博物館
- 桃崎祐輔 1999「日本列島における騎馬文化の受容と拡散—殺馬儀礼と初期馬具の拡散に見る慕容鮮卑・朝鮮三国伽耶の影響—」『渡来文化の受容と展開—5世紀における政治的・社会的変化の具体相(2)—』発表要旨集 埋蔵文化財研究会, pp.373-420
- 吉井秀夫 2007「土器資料を通してみた3～5世紀の百済と倭の交渉関係」『渡来遺物からみた古代日韓交流の考古学的研究』, pp.75-92
- 吉村和昭 1988「短甲系譜試論—鉄留技法導入以後を中心として—」『考古学論攷』第13冊 奈良県立橿原考古学研究所, pp.21-39
- 和田晴吾 1987「古墳時代の時期区分をめぐって」『考古学研究』第34巻2号 考古学研究会, pp.44-55

図出典

- | | |
|------------------------------|------------------------------|
| 図1 熊本県教育委員会蔵：筆者作成 | 図7 本村編1991：図X X VI, X X VIII |
| 図2 熊本市立熊本博物館蔵：筆者作成 | 図8 熊本大学文学部考古学研究室蔵：筆者作成 |
| 図3 熊本市立熊本博物館蔵：筆者作成 | 図9 筆者作成 |
| 図4 国立歴史民俗博物館蔵：筆者作成 | 図10 杉井2010：図19 |
| 図5 国立歴史民俗博物館蔵：筆者作成 | 図11 竹中2003：図2・3 一部改変 |
| 図6 本村編1991：図X X VI, X X VIII | 図12 西嶋2005：図1・2 一部改変 |

(宮崎市教育委員会, 国立歴史民俗博物館共同研究協力者)

(2011年7月25日受付, 2011年11月11日審査終了)

A Study of *Byōdome Tankō* Armor Unearthed in Kumamoto : Chronological Placement and Distribution

NISHIJIMA Takahiro

Iron *tankō* armor is a major burial accessory of the middle Kofun Period. Armor is a product of royal authority, and the distribution of such armor in regional society is thought to reflect the social and political relationships between royal authority and regional power bases.

The *Marozuka* Tomb is situated in the Kumamoto area of central Kyushu. There are many tombs there from which armor has been excavated, yet there have been very few studies of such armor. This study takes up the *byōdome* (riveted) armor unearthed in the area of Kumamoto and evaluates its historical significance.

First, the period of manufacture (date of manufacture) of the *byōdome* armor unearthed in the Kumamoto area was studied from the point of view of the manufacturing technology. The results indicated that most of the armor was manufactured in the late fifth century. Next, I examined the tumuli in which *byōdome* armor is found as burial accessories from the point of view of the structure of the tumuli. Here I point out that in late fifth-century Kyushu, Kumamoto was one of the areas where there was a concentration of *byōdome* armor, and that the tumuli in the Kumamoto area in which armor is found are not evenly distributed.

Furthermore, I considered the historical background to the numerous examples of *byōdome* armor found in the Kumamoto area. This revealed a number of factors behind the phenomenon of the concentration of *byōdome* armor. Those factors can be summarized in two key themes: domestic development employing new technologies, and activities directed abroad towards the Korean peninsula. The outline of such an understanding is not limited to the individual examples of the Kumamoto area, but has a major significance that can be generalized and expanded to the entire fifth-century Japanese archipelago.

Keywords: middle Kofun Period, Kumamoto area, armor, domestic development and foreign relations
